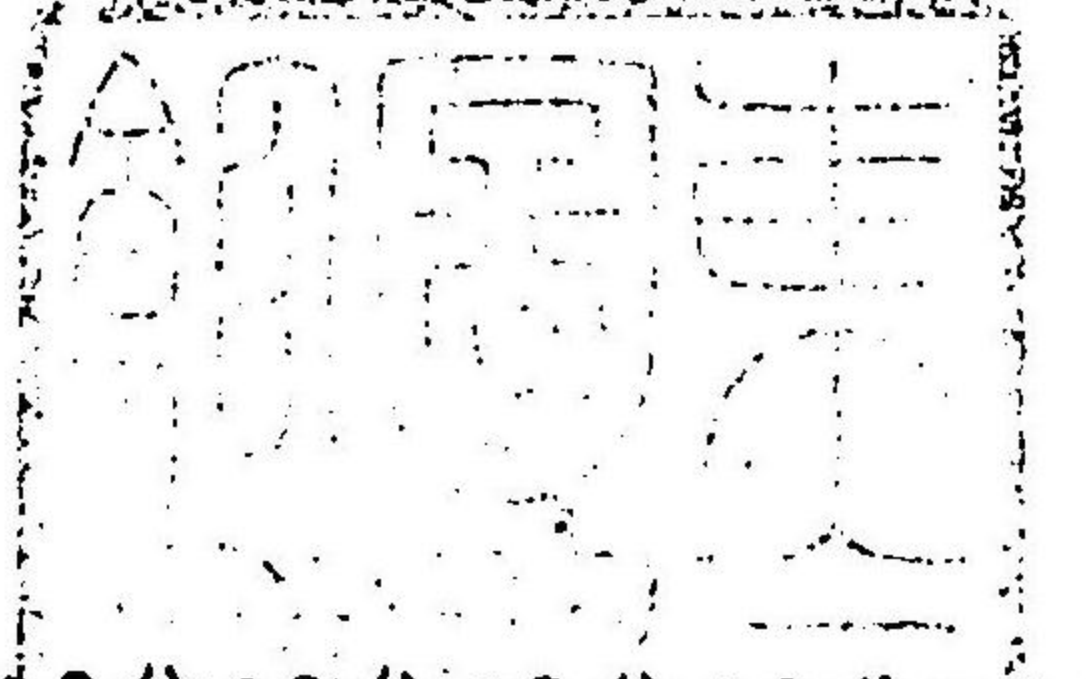
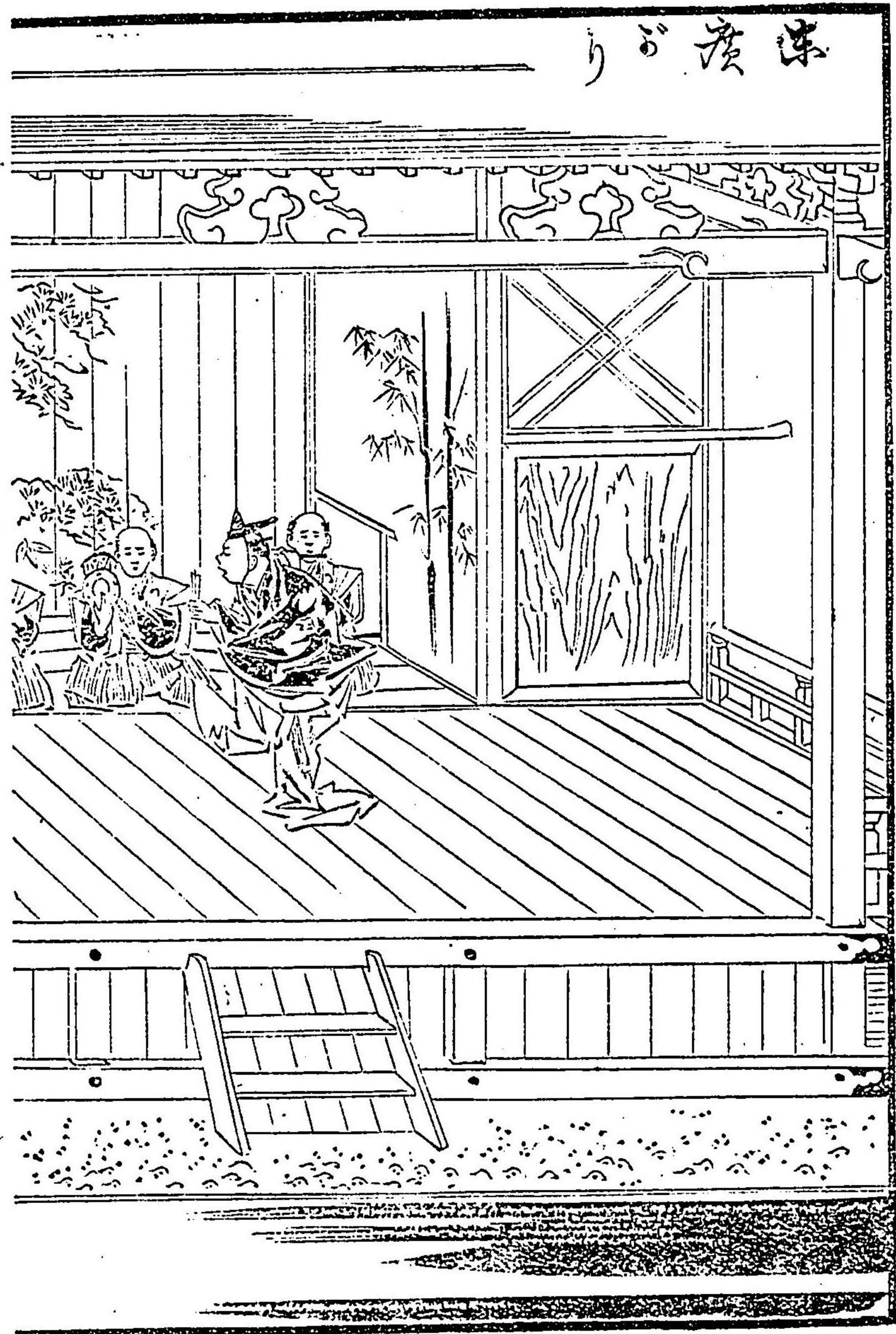
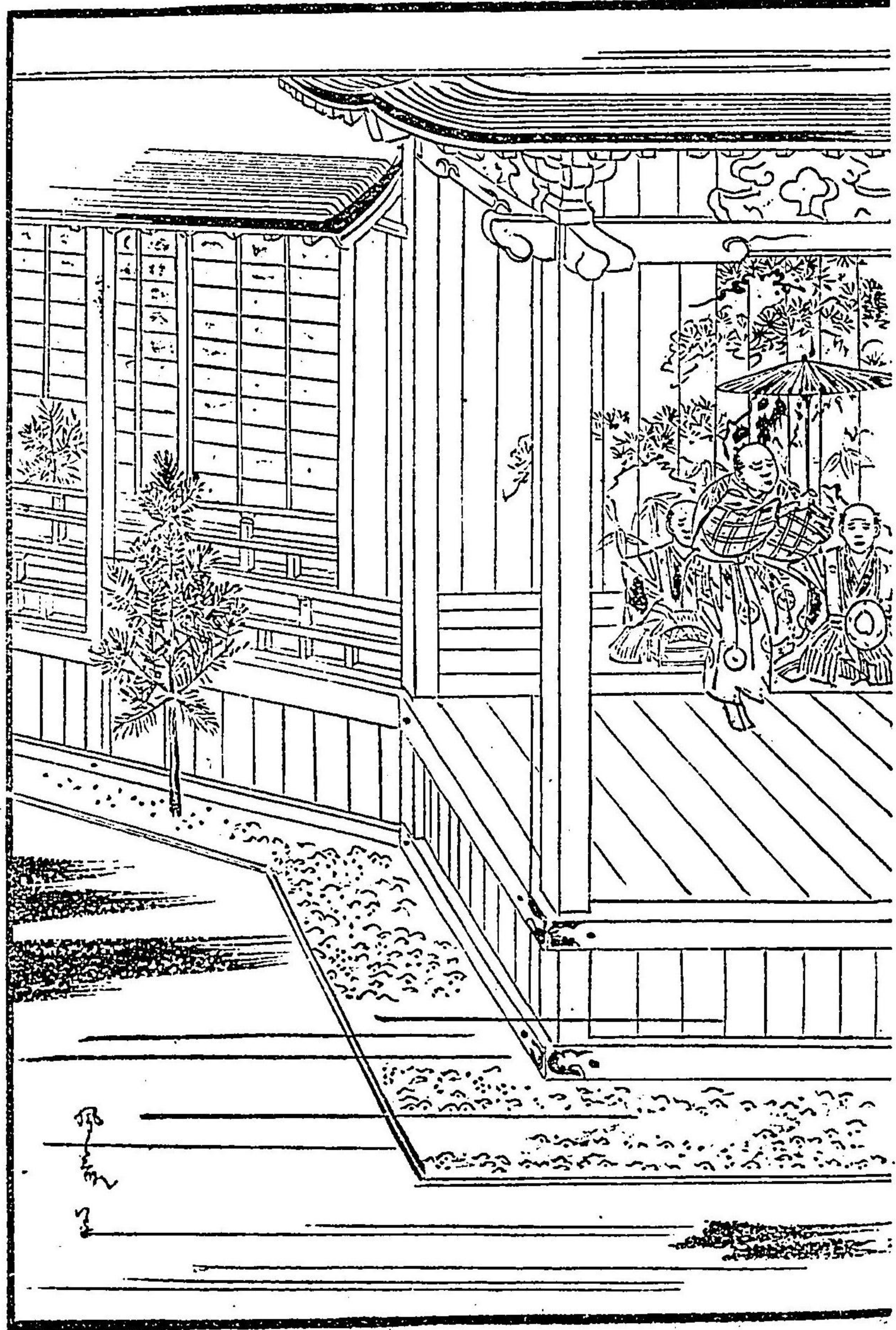


狂言獨習全書序

空天にかあづり森林に唄ふ爽々たる諸鳥花前よ舞ひ麥上よ踊る片々たる胡蝶皆夫れ風韻をこそ知るからめやハ無常の植物も亦然り況んや解語的の動物よ於てをや然れば即ち日本固有の實學たる歌俳の道こそよけめと云ふ者もありけりされど是れ心氣を養ふよ止り決して身体をして快樂せしむるを得ざるを如何せん義大夫よせん歟其品位を保つを得ざらまじきを如何せんとして鬱悒き孤燈をして顔皮を焦去せしむる年あり爰よ金櫻堂主人狂言獨習全書ある物をものして予よ序を望まる一讀するよ鸞覽三郎相傳直寫秘訣とも云ふべきの一珍冊子よして實よ興あり雅あり俳あり品あり諧あり





て以て心氣を保養し身体の快樂を求んと欲する者座右欠くべからざるの書と思ひ侍るかんめり其戯るが如く其眞面目あるが如きに至りては既に世人の熟知する處あるを以て今更喋々喃々を待ざるが故に唯其思ふ儘を草して責を塞くと云爾

啼く音よ著るき曉の酉の年太郎月上旬

東都泉街の僑舎に於て

日月園主人

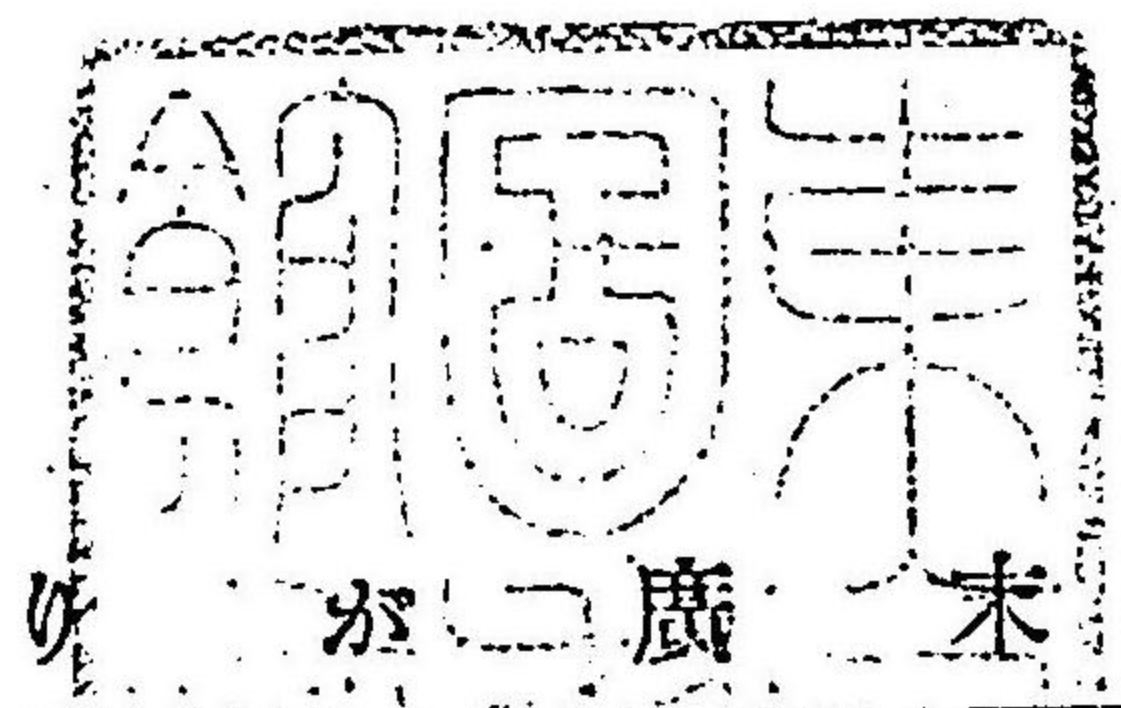
ねかりくの山をおこせを初み空

伴て鶴の舞ふかも羽子の友

# 狂言獨習全書

## 末廣がり

夫果報の者で御座る先召使ふ者を呼出し談合致す事が御座るヤイ〜太郎冠者居るかヤイ 太師ハア〜 居るか 太師ハア〜 居たか 御前よ 一段と早かつた 汝を呼出すの別の事でもかいか様よ天下治り萬づ目出度い折柄あればあまたこなたの御參會のあらけかい事でないか 御意の通り夥敷い事で御座る 夫よ〜 夫につき身も近日何づれをも招待せうと思ふが何と有らふ



ぞ 太師内々御意かくの私くしの申し上ませうと存じし所  
 で御座る一段と能う御座りませう 何じや能かろう  
 太師中々 夫は付一のお宿老達への末廣がり一本づゝ  
 進上申さうと思ふが身が藏の内は末廣がり外題を打た  
 物の無いり こなたのお藏の内は私の能う存じて居り  
 まするが末廣がり外題の打た物に御座りませぬ 汝  
 がさう云はあるまい夫からあはの都にあらふか 何  
 が廣い都で御座るは依て御座りませいで 夫から  
 汝は太義ながら都へ往て末廣がり求めてこい 畏て  
 御座る 夫はちと好むがある先地紙能からう骨は磨

をあて要元なつかとして繪の當世され繪さつと書たを求  
 てこい 畏て御座る 大かたは百疋あれども出来は  
 依て二百疋もせう程は念の入つたを求めてこい 畏て  
 御座る エイ—— ハア—— エイ—— ハア——  
 エイ—— ハア—— 太師のうく 嬉しや内々都  
 への上りたいくと存じた所で御座るは依つて此御用を  
 幸ひは五日も十日も逗留致てあかたこかたを見物致さう  
 と存れば此様か大慶か事ハ御座らぬイヤ来る程は早都近  
 うかつたと見へて殊の外に足が繁くかつた又一廻りシテ ハ、  
 ア—— 去ればこぞ都されあれからは是迄きつしりと中能さ

うゝ建並べた所の中へ田舎杯は有つてこそエイ身共の  
余り都へ上るが嬉しさのまゝ末廣がり屋の何れもあるや  
ら問はんたハテ何とした物であらふぢヤア〜何と云  
ふぞ惣して都の習ひで問ふ事も答ふる事も只呼ひつてさ  
へ歩行けは知るゝいふか夫ならば身共もちと呼はつて歩  
行かう末廣がり買う末廣がり買ひス〜イヤのう〜  
其あたりは末廣がり屋は御座らぬかヤア〜シヤア爰は  
無いと見へたもそつと上京へ参らふ末廣がり買う末廣  
がり買ひス〜イヤのう〜此あたりは末廣がり屋  
の御座らぬかヤア〜シヤア爰は無いと見へた末廣がり

買ふ末廣がり買ひイ〜  
心も直まかい者で御座るあれへ田舎者と見へて何やら  
はつばと申すちときやつは當つて見う（此中ニ段人田ルノ松ニシ）のう〜  
のうそこか人 此の事で御座るか何事て御坐る  
中へ和をりよ此廣い街道で何をわつはとおしやる  
私（此中ニ段人田ルノ松ニシ）はつと田舎の者で何事も存じません眞平ゆる  
させらいイヤをかたのわつばとおしやるを答ひるで  
かい何やら物をお尋やる様じやよよつての問事でお  
やる 私頼ふた人の御用で都の末廣がり屋を尋ます  
る（此中ニ段人田ルノ松ニシ）スレバ和をりよの仕合せ者じや 私私の頼ふ

た者は田舎に取つても大有徳人で御坐る。うりて「イヤそあたの頼ふた人を譽るではおりにない和をりよは仕合せか人じやと申事でおりにやる。太監「夫の又いか様か事で御坐る。うりて「されば其事じや惣じて都廣しといへ共和をりよの尋る末廣がり屋の亭主の身共じや。太監「あのこなたが末廣がり屋の御亭主。うりて「中く。太監「扱く私に仕合か者で御坐る夫ならバ末廣がりを求たう御坐る何卒賣つて被下い。うりて「安い事實ておませうナトお待ちやれ。太監「心得ました(うりて後見坐へ行ぬヲ持出)。うりて「コリヤ末廣がり(太監取テ見テ)。太監「是が末廣がりぞ御坐るか(返)。うりて「イヤこあたの末廣がりを知らぬと見へた今末廣がりよ

成いてお目よ懸う(金開)何と末が廣がつたぞのありかいか。太監「實にと末廣がりよありましたが夫にちと好みか御座る。うりて「夫の又如何様かお好いで御座る。太監「先地紙能からうぞ骨よ磨を當て繪は當世され繪さつと書たが望いで御座る。うりて「大かたお好みよも合ふて居ります先地紙能からうぞとい此紙の事とう紙を以て張つたれば是御覽じろこんく申す又骨よ磨を當てとい此骨の事信濃木賊掠の葉を以て七日七夜磨きすまいて御座る依て此通りすべく致す又當世され繪さつと書たとおしやるが是のこあたの聞違でおりにやる。太監「シテ夫の如何様の事で御座る。うりて「さ

れは其事じや夫のされ繪では無うてされ柄が誠で御座る  
 其仔細はもし路次にてお若い衆杯に御出逢被成た時此柄  
 をかう取直いてヤツトナ〜  
（天那ノ孫ノ先へ出る太郎）「あぶかい〜  
うりてトかうされさせらるゝによつてのされ柄で御座る  
太直委細承りました夫からバ求めたう御座るが代物のいか程で  
 御座る  
うりて「五百疋でおりやる  
太直夫の余り高直で御座る  
 ちと負けて被下い  
うりて「イヤ〜まくる事があるまい  
太直「夫からバ求めませうがアノ代物のどこ元でお渡し申ませ  
うりて「和でりよの三條の辻の大黒屋を御存か  
太直中〜  
 覺ておりまする  
うりて「夫ならバあれで請取ませう  
太直さら

ぱりう参りまする  
うりて「イヤのう〜ちとお待ちやれ  
太直「何事で御座る  
うりて「和でりよの頼ふた御方を持つた人じや  
 とおしやるが惣じて人の主といふ者は機嫌のよい時もある  
 り又あしい時もある物じやが其あしい時、機嫌の直る難  
 子ものがあるを教へておませうかとの申事で御座る  
太直「夫の忝う御座る何卒教へて被下い  
うりて「夫からバ教へてお  
 ませう  
太直「何と六ヶ敷事でおりにやるか  
うりて「イヤ〜別  
 六ヶ敷事でもおりにかい傘をさすか  
うりて「春日山是も神の誓と  
 て人が傘をさすからわれも傘を差さうよ  
太直「實もさありや  
 よがりもさうよのと云ふてお難しやれば能い事でおりにや

る 太監 大かた覺へました夫あらハ最早かう参りまする  
うりて「おりやるか 太監中く 二人サラバく 太監のうく嬉  
しや隙が入らうくかど存じたかれども安い事末廣がり  
を求めて此様お大慶お事の御坐らね加様の事とも御存じ  
のかふて頼ふたお人の大かた今戻るか」とお待兼で御  
坐らう急いで戻らうイヤ参る程早是じや (後見座へ傘ヲ置キ出テ)  
太監 申頼ふた人御坐りまするか御坐るか太郎冠者が都より  
末廣がり求めて戻りました シテ立テ「太郎冠者が戻つたさ  
うかヤイく戻たか」 太監 御坐りまするか御座るか  
シテ戻つたか 太監 御座るか シテエイ戻つたか 太監

「只今戻りました シテシテ末廣がりの求めて来たか 太監 まん  
まど求めて参りました シテ出かいたく早う見せい 太監  
畏て御坐る (傘ヲ持出) コリヤ末廣がり (田ノ主トリ見テ) シテ汝の始め  
て都へ上り永の道中雨逢ふての思ひ古傘を求めて来た  
か是をは置いて末廣がりを早う見せい (傘ヲ捨ル太郎拾ヒテ) 太監 イ  
ヤこかたに何も御存じないと見へまする シテ知らぬと  
い 太監 今末廣がり成いてお目掛ませう (前ノ如ク開キ見セテ)  
太監 何と末廣がりましたらう シテ何をぬかしおる 太監 又  
お好みも一く合ふて居りまする先地紙能からうとい  
此地紙の事とう紙を以て張たれば是見させられいこんこ



末 廣 が り

ん申まする又骨は磨きをとは此骨の事信濃木賊掠の葉を  
 以て七日七夜が間磨き濟いて御座るは依て是御覽じろす  
 べく致しまする又當世され繪と仰られたのあれのこ  
 たのお間違でされ柄と申が誠で御座る其仔細の自然路次  
 かどよてお若イ衆は出合せられた時分は是柄をかう取直  
 いてヤツトナくく (前ノ如ク) シテあふないく 太直トされ  
 させらるゝに依つてのされ柄で御座る シテおのれぬか  
 れおつたか 太直ぬかれは致しませぬ シテ何のぬりれぬと  
 の惣じて末廣がりとの扇の事じや 太直扇からは扇と初手  
 から仰あさらいで (シテ持歸ヲ太直ノミセ) シテ是ハ常の扇あれども末

末 廣 が り

でくいつと廣がつたを末廣がりといふ又地紙能からうぢ  
 どの此地紙の事 骨は磨きを當てとは此骨の事又當世  
 され繪さつとう云ふたの表は布袋の唐子遊びかあとを  
 書裏は秋の七艸かどさつと書いたをこそされ繪とい云  
 へかんぞやおのれが臺所は番所はも三百本も五百本も  
 ある古傘を求めて來た是を置いて末廣がりを早う見せ  
 い (傘ヲ取テ捨ル) 太直でも都の者が末廣がりじやと申て御座る  
 シテおのれまた其つれをぬかして是でもぬかれぬか是でも  
 かくく (打太郎橋カリーヘ遊ル) シテおのれひつくりとともして見  
 よ (トツカリト坐ニ付テ) (太直立一ノ松ニテ) 是はいかある殊の外のお腹立じ

末 廣 が り

や身共ハ末廣がりじや〜と思ふて御座るが今能々見れ  
 ハ古傘ふるかさじや是では頼ふたお人のお腹はらを立たせらるゝも尤の  
 事じや何としゝ物で有らうぞ（考テ）おゝ夫々流石りきは都人みやとび  
 じや抜ひかハ只ただぬかいで加様かさまの時ハ御機嫌ごきげんの直まるま嘸ま子物まごもの  
 を教して呉くれた急いで嘸まさう（傘ヲ開キ）傘をさすさる春日山是  
 も神の誓とて人が傘をさすから我も傘をさそうよ實まことよもさ  
 ありやよがりもさうよの〜（ケリ返シ難ス。シテ聞付ケ段々ニ乗ル能キ）ハ、ア  
 太郎冠者が身が機嫌きげんを直まさうと思て嘸ま子物まごものな致いたを見ずハ  
 なるまい（舞臺中ニテ扇開キ太郎ノガヲ覗キ見笑テ）シテ如何いかよやいかハ太郎  
 冠者 太た去されハこそお聲こゑじや シテたらされたるは憎にくけれ

末 廣 が り

と嘸ま子物まごものが面白い内へ入つて鯨くじらの鯨くじらを頬張ほぼ張ちやうて諸白しよはくを吞のめ  
 やれ 笑わらテ用もちラヌカ 此内太郎人こゝ内太郎人が傘をさすから我も傘をさそうよ〜  
 シテ何かの事は云いまい内へつゝとさしおけい 太た人にんが傘を  
 さすから我も傘をさそうよ〜  
 シテイヤー（シテ太郎トモ片足ニテ一廻リシテ太郎 シテノ上ハ  
 傘サシ掛ルトシヤキリ留メ）

シテ 紅段こうだんのしめ 素袍すぼう 小サ刀こさた 折烏帽子せぐさぼうし

太た 縞しまのしめ 狂言上下きやうげんじやうげ 紋付腰帶もんづけこし

賢人けんじん 色ナシ段いろなしだんのしめ 長上下ながじやうげ 小サ刀こさた 紅葉傘もみぢかさ

舍弟

舍

弟

シテ「是ハ此あたりニ住居致す者で御坐る某兄を一人持て御坐るがいつも某を舍弟」と申此舍弟と申事ハ能事やら悪敷事やら存じませぬ又爰ニ常々某ハお目掛させらるゝお方の御坐る程ニ是へ参り子細を承うと存る 斯う参てもお宿ニ御坐らうか御坐るまいか知れぬ事じや 一ツシテ参る程ニ是で御座る物もう案内もう 表ニ物もうとある物もうとい誰を シテ「中々私で御坐る 只今参るハ別のことかシテ何と思ふておりやつたぞ」 事でも御坐りませぬ私の兄が私の参るといいつも舍弟能う



舍

弟

來たと申すするが此舍弟と申事ハ能い事ハ惡敷い事ハ存  
 じませぬ程ハ子細を承らうと存て伺公致て御座る  
 「何と云ふぞ其方の兄が和をりよを舍弟といふハ依て舍弟  
 の子細を聞度とおしやるか」  
 「中々」  
 「其様ハ事ハ空  
 での覺へて居らぬ又爰ハ書印た物がある程ハ見て來てお  
 ませう夫ハちと待ませ」  
 「畏て御座る」  
 「是ハいかハ事扱々世ハ鈍者ハ御座る兄ハ弟を舍  
 弟と申ハ子細を聞度と申あの様者ハ誠を申も如何ハ  
 とおふつてやらうと存る」  
 「書物を見  
 ておりやるが舍弟と云ふハ余リ能う無い事ハ程ハ聞か

舍

弟

ずハ置ませ」  
 「云もせうが云ふたからは腹を立う程ハ夫が氣の毒ハ  
 や」  
 「何事成とも腹は立ませぬ程ハいふて被下い」  
 「夫からはいふ程ハ構へて立腹の召るハ」  
 「舍弟といふハ金銀衣類其外諸道具何に寄らず案内ハ  
 しに取て參るを舍弟といふよ」  
 「中々盗みの唐名でおりやる」  
 「御座るか」  
 「無念ハ事ハ御座る兄とは云はせませまい參つて果しま  
 せう」  
 「是ハ先待ませさう有らうと思ふハ依つて  
 始から口を固めた事ハ兄弟の事ハよよつて堪忍をさ

舍

弟

しませかまへて物言をさしますか。シテ心得ましたさ  
 らはかう参りまする。ちしておりやるか。シテ中々。三人さら  
 ぱく。シテ正へ向。扱もく。腹の立事かか。編リナカエ。あれへ参り  
 存分のとけねはおかぬ参る程。是じや物もう宿。御座る  
 か。兄。荒い物もうじやが誰か知らぬイヤ舍弟か其方から  
 は案内。及うかつと這入り。召れいで。シテのう兄じや  
 人今迄。舍弟の様子を知らぬ。依つて黙止。ていましてが  
 いつ身共。どこで舍弟した事。有つて又してもく。舍弟  
 舍弟とおしやる。いろ。兄弟でも堪忍。がならぬ程。覺悟。召  
 れい。兄。是は合點。が行かぬ事を云はします。仔細。があるか

舍

弟

ら。氣を静めて云ふて聞かせい。シテ又其様。を空とほけた  
 事をおしやる。舍弟といふは。盜の唐名。でおしやる。某を舍弟  
 舍弟と云ふ證據。をお出。しやれ。兄。扱。其方。どこでやら  
 人。よかぶられて。來た物。であらう。心を静めて。よう聞。しませ  
 先父親。を親父。といふ。母親。を母。義兄。を舍兄弟。を舍弟。といふ  
 程。よ能う覺へて。居て。必腹。を立。しますか。シテ又其様。を欺し  
 事。をおしやる。某を舍弟。とおしやる。其方。が舍弟。じや。兄。某  
 を舍弟。といふ。仔細。が有るか。シテ中々。いつ。や。庄屋。殿の。振  
 舞。よ呼れて。おり。やつた。で。いか。兄。中々。往。た。が。何。とし  
 た。シテ其時。臺子。の側。へ。寄。て。見事。を。天目。が。有。つ。た。れ。ハ。夫。を

舍

弟

取てひねくり廻いてあたりをじろく見て人の居らぬつ  
 がいを見て懐へ入れて歸らしました是は天目舎弟でいあ  
 いか 兄「已れ憎いやつの思ひも寄らぬ難を付けおる」シテ  
 「夫のみあらず斑らの牛を引て來て墨をこつてりと摺溜め  
 らるゝよよつて何をせらるゝかと思ふて見て居たれば彼  
 の牛の白い毛の所を塗りかくいて市へ引て往て賣しまし  
 た是は悉皆牛舎弟の斑ら舎弟の塗り舎弟ではあいか 兄  
 おのれ口の明いた儘よ云いせて置けばほうすがあ目  
 よ物見せう」シテ「何じや目よ物見せう 兄「おんでも無い事  
 棒をくらひせう」シテ「存じもよらぬ事サア」叩いて見よ

舍

弟

兄「叩かいで何とせう(三人肩ヲ脱兄ニテ叩カフトスルト)」シテ「いかよ兄でも  
 負くる事では無いぢイヤア」既中へ段セ見へたか手ヲ上テ  
 勝たぞくく」ヌゲ引 兄起テ「兄を此様にしてどれへ行ぞや  
 るまいぞく」退込

シテ 縞のしめ

狂言上下

こし帯

兄 同 断

但 おしへて同断にて也

おしへて 無地のしめ

長上下

小サ刀

# 萩大名

## 萩大名

シテ是ハ遙カ遠國ニ住居致ス大名で御坐る先召使ふ者を呼  
 出し談合致す事が御坐るヤイ〜太郎冠者居るかヤイ  
 大座ハア〜シテ居るか 大座ハア〜シテ居るか 大座御前ニ  
 シテ早かつた汝を呼出すハ別の事でもおあい永々の在京ゆへ  
 氣が屈してゐるい今日ハどれへぞちと遊山ニ出うと思ふ  
 が何と有らうぞ 大座内々御意おくの私の方より申上うと  
 存る處ハ一段とよう御坐りませう シテ身が思ふハ迎も行  
 くからじやハ依て慰にゐる面白い所へ行き度い物じや  
 大座左様で御坐る何方が能う御坐りませうかイヤ宮城野ハ



萩 大 名

何とて御坐る シテ宮城野とい 大是より奥に宮城野と申  
 す萩の名所が御坐る夫を去る人の東山の庭前へ移いて持  
 れた仁が御坐る是を御見物かされたから能う御座りませ  
 う シテ夫は今といふても自由か 大中々先の人と私の  
 知る人で御坐る シテ夫から行かうかサア〜来い〜  
シテ申出被成たから 大先ツお待ち被成ませい シテ何事じや 大あ  
 れへお出被成たから 大亭主が御仁体と見請まそれと當座  
 を御所望致しまするが夫が御合點で御坐りますか シテ當  
 座とい 大歌の事で御坐る シテ歌 大中々 シテ今流行る  
 小唄を一ツ二ツ唄はう迄よ 大其事での御坐りませぬ三

萩 大 名

十一字の歌の事で御坐る シテ其つらね様をば知らぬわい  
 大 夫が御存じかければ御見物のちと成り憎う御座る シテ  
 「是非とも所望するか 大御仁体と見請ますると無理も  
 所望致しまする シテ異ナ事を所望するか 大左様で御  
 坐る シテ是非及ばぬ見に行きまい迄よ 大是程と思し  
 召立れましたを哥一ツて御見物被成まいとは余り残り多  
 い事で御座る シテ身も聞かぬ先こそあれ汝が面白さうよ  
 いふよ依て見たうてこらへられぬ 大何と致しませうぞ  
シテ申能い事が御坐る シテ何とする 大今の宮城野を去  
 る人が見物せうと有つて歌の下讀みをして置れましたを



萩 大 名

私の覺へて居ります今こなたへ御相傳申ませう其者より先へ往てこなたのお読みかざるれば則此方のお哥よな  
 りまするが是は何とで御坐らうぞ シテ何と云うぞ今の宮  
 城野を去る人が見物せうとあつて哥の下讀をして置れた  
 を汝が覺へて居る某へ相傳をせうぞ今の者より先へ往て  
 讀めば則身が哥よ成といふか 太中く シテ若て夫ハ六  
 ツケ敷事か 太別よむづか若い事でも御座らぬ七重八重  
 九重とこそ思へども十重咲出る萩の花かかと申事で御坐  
 る シテ夫ハ誰がよむ 太此方の讀せられます シテあの  
 身共一人りして 太一人りして讀まいで哥を幾人して讀

萩 大 名

む物で御坐らふぞ シテいか五日十日稽古してもあるま  
 い 太今の程の事が成りませぬか シテ中く 太扱もく  
 氣の毒を事で御座る何と致しませうぞ 又申是も能い  
 事が御座る物よよそへてからハ讀せられませうか シテ物  
 よよそへてからはいわいでは 太夫からは私のこ扇を  
 遣う眞似を致いて七重八重と申時よはこ扇を七本お目  
 よ掛ませう 太七重よ七本是は面白い 太八重よ  
 八本 シテ八重よ八本 太九重よ元より九本 シテ九本  
太十重咲と申時よはらりと皆廣げませう 太はら  
 り 太是でハ云うぞ 太跡の萩の花かか是りや仰られま

萩 犬 名

せう シテは、、、 太萩 シテ又夫があらぬ 太あのは  
 かりの事がありませぬか シテ中く 太某もあきれまし  
 て御坐る シテ随分鈍に生れ合ひいた シテ何と致しませうぞ  
 是も能い事が御坐る私の御存じの通り古殿様の代より召  
 使りなれまして御坐るがいつもお叱りかさるゝ時ヤイそこ  
 か臍腔の延たやつといふてお叱りかされて御坐る萩と申  
 時分の慮外がから私のこう向うすねを御目よ懸ませう  
（すれヲ見スル） シテ誠まさう云ふてお叱り被成たすねはぎく是  
 での云ふぞ 太跡の萩の花かあこりや仰られませうぞ  
シテいか鈍さといふても是の世間よ澤山ある物じやよつ

萩 犬 名

ていわけいで 太夫からはさつと濟で御座るこう御出被  
 成ませい シテ行うかサアく来いく 太畏て御座る（道行）  
 既よ見よ行まいと若たを汝のいろくといふて見よ行く  
 やうか大慶か事のかい 太イヤ私も折角と思召立れま  
 して御座る程よ何卒お目よかけませうと存て御座るに加  
 様よ御供致すやうか嬉しい事の御座りませぬ シテして程  
 の遠いか （極カ、リニスル） シテイヤ何かと申内よ是で御座る シテ  
 「是か 太其通り申ませう程よ夫よちとお待ち被成ませい  
（シテ極カ、リニ立テ待ツ） 太郎ハシテ柱ノ方ヘ向テ）物もう案内もう（テト笛ノ上ニ立） ア上表よ物もうと  
 ある案内のイヤ太郎冠者殿で御坐るか 太中々私で御

萩 大 名

座る アト何と思召て御出被成て御座る 太極只今参るハ別の事でも御座らぬこかたのお庭の事を頼ふた人の聞かせられて見物致したいと申て御坐る何卒見せて被下い アト安い事での御座れども此間掃除を致さいで不奇麗御坐る程よありますまい 太極其おきれいからハ苦しう御坐らぬ早是へ御出被成て御座る アトヤアハ早是へお出で御坐る 太極中ハアト夫からハいかどの申されまますまいこうお通り被成るハ様よおしやれ 太極忝あう御坐る(シテノカヘ申御坐りまするか) アト何と見せうといひるハか 太極其通り申て御坐れハ此間掃除を致さいでおきれいお依てあ

萩 大 名

りまますまいと申て御座るを苦しう無と申て御座れば見せうと申まする シテ夫からハ通らふか 太極能う御座りませう(シテ下ヲ見テ) シテエイ飛石見事を石じやナア 太極左様御座る(目付柱ノ) シテ柴垣田舎杯の柴垣と違うてしほらしい結様シヤア アト庭ニテさらハ 太極亭主 アト下ニ居ル シテ是が亭主か 太極中々 シテ麓忽ハ庭を見物ハ参つたハ早速見せてお呉りやつて祝着致した アト見苦しい所へお腰を掛させられて近頃満足御坐りまする シテヤイ見ぐるしいのぶきれいのおしやるが此廣い所ハ塵が一ツかいハ 太極「左様で御坐る」シテ是ハ斯うしては見られまい其床几を持

名 大 萩  
 て 太藪「畏て御坐る」(但し桶出ス) シテ「泉」水じやな 太藪「御意」  
 の通りで御坐る シテ「あの中」の島を見よ小「さい」石がちよこ  
 くといくつもあるハ 太藪「御坐り」まする シテ「定て」あれハ  
 洞庭の落「ら」つとでも云うぞ 太藪「し」ハ(フサグサ) 太藪「平沙」の落  
 下「平沙」の落「ら」つとでも云うな 太藪「左様」で御さる シテ「色」  
 々の作り木があるハアノ遠「たか」山の体を見よさかから自然「じぜん」の  
 山の様「よう」もある 太藪「其通り」て御坐る シテ「あ」のちよろく「く」落  
 るハ何「なん」じや 太藪「瀧」シテ「瀧」 太藪「中」く「く」シテ「亭主」瀧見事「じ」お  
 りやる ア「ア」何と御坐りませうか シテ「すれば」あ「あ」の瀧「たき」此「こゝ」泉  
 水「みづ」へ落「おち」るじや迄 太藪「御意」の通りで御さる シテ「そこ」か木「き」ハ

名 大 萩  
 何「なん」じや (自付柱「みづ」見じ) 太藪「どれ」で御さる シテ「梅」じや 太藪「梅」で御さ  
 りまする シテ「古」木「き」と見へていろく「く」の枝「えだ」があるハ 太藪「御」  
 坐り「まゐ」りまする シテ「中」よもそこか枝「えだ」を見よ脇「わき」へぬつと出てき  
 り「い」どねちて上「あが」つと上「あが」つたハ (弱「よわ」ニテ仕形「しぎよう」スル) 太藪「上り」まし  
 て御座る シテ「あれ」ハ何「なん」ぢや成「な」さうか物「もの」じや (巻「まき」) 夫「おとこ」く「く」引  
 切「きり」て茶「ちや」臼「うす」の挽「ひき」木「き」ませうぞ 太藪「し」ハ(太藪「下」) (フサグサ) シテ「あ」の「に」  
 よつと立「た」つたハ何「なん」じや 太藪「立」石「いし」 シテ「立」石 太藪「中」く「く」シテ  
 「亭主」立石見事「じ」お「お」りやる ア「ア」あれハ私「わたくし」の自慢「こゝろ」の石「いし」でござ  
 る シテ「さう」見へてお「お」りやる山石「やまいし」か海石「うみいし」か 太藪「去れ」は何「なん」れ  
 で御さるか シテ「何れ」性「しやう」のよささうか石「いし」じや 太藪「左様」で御

萩 大 名

座る シテ脇に鼻の出た所があるあれ何ぞも成さうか物  
 じや ヒ夫く打かいて火打石よせうぞ 本蓋し、下々聞  
 まする シテ是はされ事じや 本蓋鬼角頼ふた人のおされ事  
 深う御坐る アトイヤ加様の所での何成とも仰られたが能  
 う御坐る シテのう亭主あの石を人の打欠かう杯と云とも  
 必かゝしますか アトあれは私の大事の石で御坐る シテさ  
 うで有うの 見花があるの 本蓋宮城野 シテ宮城野 本蓋中  
 く シテ亭主宮城野見事で御坐る アト私の庭のあの宮城  
 野で持まして御座る シテさうであらうヤイ汝も見よ白  
 花もあり赤い花もあり花の上へ花の重り重つた所の其儘

萩 大 名

赤飯ともいわうあの所くよ下つたの何じや 本蓋短冊  
シテ短冊見事よおりやる アト何と御座りまするか申太郎冠  
 者殿何れも是へお腰を掛させられましてのあの如く當座  
 を遊ばされます殿様よもらと遊ばさるゝ様よ仰上られて  
 下されい 本蓋頼うだ人の何と御坐らうり シテへ向き亭主申ま  
 する何れも此所へお腰を掛させられましての皆當坐を申  
 まさる此方よもお當坐を遊ばさるゝ様よと申まする シテ  
 「當坐を 本蓋中く シテのう亭主身は不調法じやよ依て  
本蓋お慰みよちとよう御座りませう （聞） シテ斯うも有らふ  
 か アトお早う御座る シテ七本八本 アトヤアく 本蓋若く七重

名 大 萩

八重 シテ七重八重 アト七重八重 シテ九ツ時と アトヤア〜  
(太郎ハ一ツ見セム) (口ヲフサク) 太蔭、九重とこそ思ひしよ シテ九  
 重とこそ思ひしよ アト九重とこそ思ひしよ シテバラり アトヤ  
 ア〜 太蔭、十重咲出る萩の花哉 (トすねを出し見セテ) シテ十重咲  
 出る アト何と七重八重九重とこそ思ひしよ十重咲出る先ハ  
 面白う御座る シテ何と御座らふか亭主にもちとお讀みや  
 らりやう物を アト私も讀ませうが逆もの事よ此先を承り  
 ませう (アハツ) シテ先はもう能うおりやる アトハテ能と申事  
 が御座らふか平は遊ばせ (此内シテイロ) シテ和でりよも欲の  
 深い事をいふ人じや七重から十重迄咲た跡が有る物でお

名 天 萩

りやるか アト夫では歌が短かう御座る シテ短かくは長う  
 して進上十重咲出る引—いか程もお引きやれ アト夫での  
 歌の文字が足らぬ シテ是も足しておませう十重咲出る〜  
 〜一万ありと二万ありとおしやれ アトあらこゝな人は  
 某をかぶりよ来たか其先をいはぬ内は跡へも先へもやる  
 事でのかい (シテノ耳ト手ヲトリ引廻シシテ柱ノ) シテ太郎冠者〜 (太郎出ル)  
 アトサア〜云ぬか〜 (太郎ヲ見テ) シテ思ひ出た云ふ〜十重  
 咲出るの先か アト中〜 シテ先は物と アト何と シテ物と  
 アト何と (正面上ニ人) シテ十重咲出る引— (太郎出てすねヲ) シテ太郎冠者の  
 向うすね アトあのやくたいあしとつとおかへりやれ シテ

「あら面目もおりあし

名 大 萩

段のしめ	素袍	小サ刀	大臣烏帽子
<small>但シ 長上下ニテモよろし</small>			
太藪	縞のしめ	狂言上下	こし帯
穿	無色段のしめ	長上下	小サ刀
			腰桶

立 腹 不

不 腹 立

「是ハ此あたりの者で御座る某此中小庵を結んで御座るが今ハ定まる住寺が御座らぬ又身共一人りでの御座らぬ爰ハ同行の御座る程ハあれへ参り相談致さうと存る先づそろりく」と参らふ。斯う参つてもお宿は居られうか居られまいか知らぬ事じやめいよお隙あしじや。依つて知れぬ事で御座る何かといふ内是じや物もう案内もう

又アトハナモ  
アトニ付テ出ル  
又アト立テ  
物もうとハイヤこなれで御座るか

中々身共で御座る。又アトシテ「只今ハ何と思召てお出で御座る。ハイヤ只今参るハ別の事でも御座らぬ内々の小庵の



不 腹 立

事<sub>ニ</sub>就<sub>テ</sub>参<sub>リ</sub>て御座る何とこあたの方に似合しい御出家は御  
 座らぬか 又<sub>ト</sub>「某も方<sub>々</sub>」と詮義致せども能い御出家が御  
 座らぬ何とこあたには御座らぬか 又<sub>モ</sub>身共も自身かけ廻  
 つてせんぎを致し又は人頼みを致て尋まするが有るの  
 某の氣<sub>ニ</sub>入らむよいは小庵のいや杯と云ふて埒が明か  
 ぬよよつて今日<sub>ハ</sub>打連立て町表へ往て能さうか出家も通  
 らふからは留ませう 又<sub>ト</sub>「是ハ一段とよう御座らふ 又<sub>モ</sub>夫  
 からは参りませう 又<sub>ト</sub>能う御座らふ 又<sub>モ</sub>「サア」御座れ  
 くこう参つても何とよい御出家が通らるれば能う御座  
 るが 又<sub>ト</sub>「其通りて御座る」 又<sub>モ</sub>「参る程よ是ハ早人の通



不 腹 立

る津で御座る爰許に待合せませう 又「能う御座らふ(三人坐)」  
シテ出「是の此傍りの僧で御座る諸國行脚に出うと存る先を  
 ろりく」と参らふ 惣じて出家と申者の若い時に國を  
 廣う見て置かねば胸がせまいと申程に風と思ひ立て御座  
 る又能さうか所も有らば足をも留うと存る(此廻ル中ニヲモ)  
 「申是へ能い御出家が見へまする先言葉を懸ませう 又「能  
 う御座らふ(兩人立シテヲモ)」若く申しお僧の何國へシテ風木  
 の葉の散る如く 夫ら面白い御返答か是よの子細が  
 御座るか 中々謂れこそ御座れ惣て木の葉と申物の風  
 が誘引へは何國へも参る又留れば留る愚僧も其様を身代

不 腹 立

の者との事で御座る 委細承りまして御座る加様も申  
 も別の事でも御座らぬ某小庵を結で御座るが今も似合し  
 い御出家が御座らぬが若左様か所へも御出被成て下され  
 うかどの申事で御座る 只今も申通り留てさへ被下れ  
 うからば何方へありとも参りませう 夫の近頃忝う御  
 座る又某一人でも御座らぬ爰も同行の御座る程にお引合  
 せ申しませう 夫のともかくもで御座る 申く此  
 方もあれへ往てお近付にあらせられい 心得ました  
ヲモ「此仁の事で御座る 不案内に御座る 不知案内も  
 御座る 又「此仁の小庵の事を申て御座れば早速御同心あ

不 腹 立

つて忝かたじけかう御座る シテお禮までも御座らぬ ナモ追お付けお  
 供が致したう御座る シテ只今かりとも参りませう ナモ先  
 こかた御座れ シテ御兩人の内一人先へ御座れ ナモ兩人の  
 内と仰らるゝ依よて私の先へ参りませう ナモ能う御座ら  
 ふ ナモサア〜御座れ〜 (段ニ題シ) シテ其方の跡から御座れ  
 ナモ申〜御出家を跡よ致いたいでないか物で御座る シテ少すこし  
 も苦くるしうの御座らぬ ナモ假初かまよ詞ことばをかけたして御座れハ  
 早速御同心あつて加様よお供致たを様お大慶お事ハ御座ら  
 ぬ シテ某も此方衆と連立うとの夢よも存せななたが是も  
 佛の引合せて御座らう ナモ其通りで御座る ナモ定めて御

不 腹 立

手跡杯てしもよう遊あすで御座らふ シテ何と物を書かど仰せ  
 らるゝか ナモ中〜 シテ書と申程の事での御座らぬ蚯蚓  
 の這ふた跡の様お事を致す ナモ夫ハ定めてお卑下で御座  
 らふ斯様に申すも別の事でも御座らぬ此仁も某も弟子供  
 を數多持たて御座るが後〜 を御指南を得たさよ申事で御  
 座る シテ不調法ふてうハ御座れどもおさかい衆へ教おしるはつゝ  
 よ得手えで御座る ナモ夫ハ嬉しう御座るサア〜御座れ〜  
 ナモもし經を御存じか シテ先某の存じましたは法華經一部  
 八卷無量壽經普賢經合せ十卷其外阿彌陀經藥師經地藏經  
 やちくちや經たゝらくたら經迄覺へて御座るが其中にも

不 腹 立

し經と申は存せぬ ナモ夫のあの人の申誤りで御座るもし  
 經をバシ御存じかどの事で御座る シテ夫の出家の役じや  
 物を存じませいで ヲモ御尤も御座る 又アト申是へ御座  
 れ 又アトヲ臨座ノ方ヘ呼ブ 此内シテハ殊數ヲ繰リ念仰チ申テ居ル ヲモあのお人のお名を知らぬよつ  
 て今の様を申誤りが御座るお名を問ませう 又アト能う御座  
 らふ ヲモ申く 此方のお名を知らぬよ依て今の様を申誤  
 りが御座るこあたのお名は何と申ます シテアノ某の名  
 の事で御座るか ヲモ申く シテ夫よちと待たせられい  
ナモ心得ました シテハテいお事よつまらせられ  
 た シテ是のいにかお事某の師匠の今迄子僧く

不 腹 立

とばかり云れて名を付かんだ何とした物で有らうぞ院號  
 を付うか坊號を付うか思ひ出した 又舞臺へ出ル 申く 某の名  
 の事で御座るか ヲモ申く シテ某の名の腹不立の正直坊と  
 申 ナモ是の又珍敷お名で御座る シテ申く 謂れこそ御座  
 れ某の師匠の心安う眠藏迄遣はれて御座るがついよ楊枝  
 一本違へた事もかし又何程無理をいふて叱られても一度  
 も腹を立ぬとあつて夫ゆへ腹不立の正直坊と申 ナモ御斷  
 を承りましてさながらお光りも増すやうよ御座る シテ是  
 の結構を御挨拶で御座る ヲモ申く こなたあれへ往てお  
 名を問せられい 又アト心得ました申く 私いあれよ居てこ

不 腹 立

かたのお名を承りませぬ此方のお名は何と申まする  
 「實」どこかたのあれは御座つて名をお知りやるまい某の  
 名の腹立すの正直坊と申す只腹を立いで正直なとさへ思  
 召せば濟む事で御座る 又「上」御尤は御座る 又「モ」申是へ御座  
 りませい(此内又シテハ)「何」と思召す楊枝一本違へた事は無い  
 と申が是の出家の事じや依てかうも御座らふが何程無  
 理をいふて叱られても一度も腹を立ぬと云いちと賣主で  
 の御座らぬか 又「上」其通りで御座る 又「モ」夫からハ路次すが  
 らあふつて見て腹を立ぎの誠で御座る又腹を立れば賣主  
 で御座らう 又「上」左様で御座る 又「モ」申く私はず

不 腹 立

と物覺への鹿相の者で今仰せられたお名を早忘れまして  
 御坐るが儘かたのお名のはらゝの障子骨とやら仰ら  
 れた 又「上」ア、ヲ和をりよの出家の名ははらゝの障子骨  
 と云ふ名がある物か某の名は不腹立の正直坊と申 又「モ」ア  
 ア和をりよのちと腹を立るが 又「上」イヤ腹立ぬ 又「上」申く  
 私はつゝと鈍な者で今仰られたお名を早忘れましてか  
 たのお名の儘はらゝ小木の正月坊とやら仰られた 又「上」ア、  
 ヲをかた衆の様は描つて鈍か人の有るまいどこよか出家  
 の名は腹小木の正月坊といふ名がある物り某の名の腹立  
 すの正直坊と申 又「上」ちと腹を立るは 又「上」イヤ腹立ぬ 又「モ」

不 腹 立

「イヤ申ておたのお名のはじかみの生姜坊と申り シテハチ  
 扱くとい某の名の腹不立の正直坊と申 ヲモそりや腹立る  
 は シテイヤ腹立ぬ (是ヨリ二人シテノ耳ヲトクハ一返引廻ス) ヲモヤイ坊主こちへこい己  
 れの名の何と云ぞエイ シテ名を問は只の問いで人の小耳  
 のせゝを取て引廻す身共の名は腹不立の正直坊と申 ヲモ  
 「そりや腹立るの シテイヤ腹立ぬ 又アトヤイ坊主おのれが名  
 の何といふぞエイ シテ名を問は只の問いで右からも左り  
 からも人の小耳のせゝを取つて引廻す某の名は腹不立の  
 正直坊 又アトそりや腹立る シテイヤ腹立ぬ (是ヨリ兩人シテコソアルヲモ右又アト在リ)  
ヲモ腹立ぬ シテ腹立ぬ 又アト腹立ぬ シテ腹立ぬ (兩人シテノ手ヲチヂルシテノ) 二人そりや腹

不 腹 立

を立るのへ シテ手ヲフリハナシ シテ腹は立ぬが右から左りからも  
 なぶるよ依て身共のどうがよゆるト 進テ入ル 二人あのまいます  
 坊主やるまいぞく 退返

シテ 縞のしめ 狂言袴 合仕頭巾 無地こし帯

十とく

アト二人 無地のしめ 長上下 小サ刃

水掛聲

水掛聲

アト見舞ヲカツキ出ル  
 アト是ハ此あたりニ住居致す者で御坐る此中  
 ハ久しう田地を見舞ませぬ程ニ今日ハ見舞うと存るまづ  
 そろりくと参らふ 道行 此間は彼是隙入が御坐つて見舞  
 ませぬに依て如何様ニ成つと定めて水やり杯もその様  
 にかつたやら知れぬ事で御坐るイヤ来る程ニ是で御坐る  
 大臣桂ノ方子見 是ハいか事何者がして置たやら水上ガ留て田  
 水ガかい扱々憎い事で御坐る爰を切り明けて水を通う  
 さう (ト鉄ニテ堀ル様ニスル) ハア水がくるハハ 是でこそよけれ  
 又明日見舞ませう 後見座ニ付 シテ働ヲ持出ル シテ是ハ此所の百姓で



水 掛 聳

御坐る某當所<sup>一</sup>田<sup>た</sup>畠<sup>はた</sup>を數<sup>ま</sup>多<sup>た</sup>持<sup>つ</sup>て御坐るが此中はいそがし  
 うて久<sup>ひさ</sup>敷<sup>し</sup>う見舞ませぬ今日は天氣も能う御坐る程<sup>一</sup>參<sup>ま</sup>て  
 見うと存るまづそろりく<sup>一</sup>と參らう 進行 此間見舞ませぬ  
 に依<sup>よ</sup>て田<sup>一</sup>竹<sup>たけ</sup>や杯<sup>さか</sup>も有うが又水杯も有らうか見やうと存  
 る シテ柱ノ方見テ イヤ來る程<sup>一</sup>是<sup>一</sup>からが某の田で御座る是の  
 いか事田<sup>一</sup>干<sup>ひ</sup>てあるの先日水のとつくりとか<sup>一</sup>る様<sup>一</sup>  
 して置たが何者やら水を切て流しおつたか扱もく<sup>一</sup>憎<sup>にく</sup>い  
 事で御座る ニテ留ル様ニスル 是でこそよけれ下<sup>した</sup>を留<sup>とど</sup>められ水が  
 溜<sup>たまり</sup>るは是でよい又明日見舞ませう 後見坐へ付 アト又出 アト昨日<sup>きのう</sup>田<sup>一</sup>をどつ  
 くりと水のか<sup>一</sup>る様<sup>一</sup>致<sup>いた</sup>して置て御座るがいよく<sup>一</sup>水が掛<sup>か</sup>

水 掛 聳

るか今日も見舞うと存る 免ノ如ク見テ 是のいか事又水上を  
 せいて水を留<sup>とど</sup>めたの扱もく<sup>一</sup>腹<sup>はら</sup>の立<sup>た</sup>事<sup>じ</sup>で御座る折<sup>ち</sup>角<sup>かく</sup>骨<sup>こつ</sup>を  
 折<sup>ち</sup>て拵<sup>しら</sup>へて置たがいつの間<sup>一</sup>此様<sup>一</sup>したか思へばく<sup>一</sup>腹  
 のたつ事で御座る今日<sup>一</sup>是<sup>一</sup>は附<sup>つ</sup>いて居<sup>ゐ</sup>て何者が致すやら  
 見付うと存る (大臣柱ノ方へ) 下ニ居ル シテ又出テ シテ昨日<sup>きのう</sup>田<sup>一</sup>を見舞まして田<sup>一</sup>の  
 嚙<sup>か</sup>を留<sup>とど</sup>めて水の溜<sup>たまり</sup>る様<sup>一</sup>致<sup>いた</sup>して御座るがいよく<sup>一</sup>水がか<sup>一</sup>  
 るか今日參て見うと存る定めてたつふり掛らうとい存<sup>ぞん</sup>れ  
 ども心<sup>こころ</sup>許<sup>ゆる</sup>無<sup>く</sup>う御座る (シテ柱ノ方へ來) 是のいか事又水の瀬<sup>せ</sup>を  
 切<sup>き</sup>て流しおつた扱もく<sup>一</sup>腹<sup>はら</sup>の立<sup>た</sup>事<sup>じ</sup>か (又留ル様ニシテ居ル) アトの  
 うく<sup>一</sup>誰<sup>た</sup>が水をせくと思ふたれば扱<sup>と</sup>をあたか シテお出

水 掛 聳

被成て御座るか アトお出被成たかどの此中アトとつくりと水の掛かる様に水遣みづはらりを拵しらへて置たれば上が留とどめて有る扱あひをかたか聞へぬ人じや シテ扱あひ田の疇しほを切て水を流したい此方こゝで御座るか人がせうと儘ままよ出させられた時とき分ぶんよ能うして置て被下れうといせいで此様に田を河原かゝらの様よ干かして置せらるゝの親方おやぢ分ぶんには似合にあぬ事で御座る アト和わでりよの返かへりくじか事を云いそちこそ若わかい者ものじやよ依よて折々見舞うた時とき分ぶんよ身共みどもの田よ水がかくの掛かて置て吳いやうといせいで年寄としよりつた者が能うして置けの跡あとから來て水を留とどめて置します夫が子方こゝろの作法さくしでおりやるか シテ其義そのぎは身共みどもの

水 掛 聳

知らぬ此方こゝの田に水がかければ田あが干かわ上ある 又留ル様ニスル アトさう云ふて留ても身共みどもが留させぬ 又流る シテそあたが切流きりながさうとしても身共みどもが切らせうか 留ル様ニシテ水ヲ掛ル アト是これは々ごとなせよ水を掛けた シテ劔やいばがかゝつたからは堪忍かんなんをめされい アト堪忍かんなんのせいと云ふて人の面おもてへ泥どろをかけてよい物か アトホチカケル シテこあたのあせよ泥どろをかけさせらるゝ アトちと掛つたが大事か シテ大事だいじるとい何事で御座る 又ニ水ヲ掛合フ シテ「是はいか事如何いかこといかごとよ親方おやぢ分ぶんでも堪忍かんなんがあらぬ アトイヤ己おのれの憎にくみやつの某たがひも堪忍かんなんがあらぬ 三人組合 イヤアーくく 女房にやうぼうが出テ 一ノ松ニテ 女にやうぼう「のうく夫は誠か是まことはいいか事ことどこよか親子おやぢこゝろい



水 掛 響

さかいと云ふ事が御座らうか申くと、様爰を放させられい（アトへ取り付）アトおのれの親を知らぬかあつちへ取つけ（女アトチ放シ）女「申く内の爰を放させられい（シテ）己れ男を知らぬかあちへ取付け（女アトへ取付）女「申く爰を放させられい（アト）おのれ親を知らぬかあつちへ取付け（女アトシテ）申く内の堪忍の被成い（シテ）おのれ男を其様にしたからほ内へ寄せまいぞ（女）内へよせまい（シテ）早う足を取つてほかせいやい（女）心得ました（女アトノ足ヲ取り二人シテ扱ル）見へたか出かいたく早うこちへこい（女）心得ましたく（女ヲ連テ幕へ入ル）アトヤイ親を此様よしてとれへ行が罰當り（女）

欠

MISSING

清

水

者の事あれば夏ならば冷若すまいて吞せう又冬ならば爛  
 をして吞せうといせいで只さめ廻して使ふ計が能か己れ  
 吞せうか吞すまいか今ぬかせ吞せんよ於ては胴骨を嚙折  
 つて呉れうぞキツト見ル主「中く吞せませう程よ只命をば助  
 けて下されい」シテ「またあるあの脊丈ケの延た者よいまた  
 刀をも差せぬと聞いた是も差せうか差すまいか今ぬかせ  
 差せんよ於ては手も足も無い者よしてのくるぞ」主「返り  
 次第拵へて差させませう程よ只命をば助けて下されい」  
シテ「夫からば助る事も有らうが某の歸る方を見るか」主「見  
 ますまい」シテ「見るか」（夫爾段々睡へ退クカ振り返リ見ナガラシ）主「見ますまい」

清

(主段々少シツ、首上テミル) シテ「見るか」主「見ますまい」シテ「見るか」主「見ますまい」  
 いシテ「夫見たげか」(念ニ振り返リ二三足戻ル) (主首下ダテ) 主「イヤ見ませぬ」(シテハ直ニ後見坐へ行面ヲトル) (主ソロ／＼ト立膝ヲシテ) 主「是はいかか事太郎冠者の申を偽りかど存じたればあまの命を拾うた先急で宿元へ歸らう」(戻ル) (シテ柱へ出テ) シテ「知らぬふりしてお迎へ参らう」(廻リテ出合フ) 主「太郎冠者」シテ「頼ふたお人」主「汝のどれへ行く」シテ 余り遅さよお迎へ参つて御座る 主「來ずと居いせいで」  
シテ「何と鬼がออกมาして御座らう」主「イヤ／＼何と出あかつたよ」シテ「お隠しあされませうお色がわるう御座る」主「此二三日風邪を引いた」(ウシロテ向ク) シテ「後に棒の跡が御座る」(主ソリ)

水

清

向キナガラ 主「棒の跡の無い筈じや」シテ「お膝は土が付ました」(向ノ内ニ主ノ側へ行キ膝ヲ拂見テ) 主「何を隠さう鬼が出たやい」シテ「申さぬ事か」主「あの鬼の異を鬼で汝がひいきをしたは」シテ「何と申ました」主「あれの一ツ吞者の事かれは夏ならば冷しすまいて吞せい冬からは爛をして吞せいの或の刀を差せいのと汝が爲しの皆能事ばかり云ふた」シテ「左様の事も御座りませう私の先祖は鬼祖父とやら鬼祖母とやらが有たと申まする」主「わこわもの」(主袖ヲ顔カケル) シテ「是は何事で御座る」主「汝は鬼の子孫じやどの云ぬか」シテ「夫いつと昔の事で今其様か事の御座りませぬ」主「何と夫の昔の事

水

清

で今の其様を事のかい シテ「中く」 主「最前汝が清水へ往  
 た時鬼の何と云ふた七ツ下つて シテ「七ツ下つて人の來ぬ  
 所へ來た天窗からいで喰くらう （天キク云カケテロチフサゼ）ト申て御座  
 る （主脇へ退イテ） 主「是のいか事清水の鬼の聲と太郎冠者の聲  
 と同じやうで御座るが合點がの行かぬ事じや何とした物で  
 有らうイヤ思ひ出した 又シテへ也 ヤイく 太郎冠者さいせ  
 ん汝が清水へ往た時鬼の何といふた シテ「最早よろう御  
 座る 主「能と云はずといへ シテ小聲こニテいで喰はうと申て御座  
 る 主「さうでさいさいせんの様よいへ シテ「いで喰らう—  
 と申て御座る 主「イヤくさうでも無いさいさいせんのをう

水

清

よ勢いひかゝつていへ シテ「勢かゝつて 主「中々七ツ下つて  
 人の來ぬ所へ來たあたまからいでくらはうと申て御座る  
 が何と恐ろしい事での御座らぬか 主「誠まことよ思へばここの  
 事じや去きあがらあの桶が余り惜あしい今一度往て見て來きう  
（シテ留テ） シテ「先待ませられい一度の懲おとせで二度の死しをするとい  
 此方の事で御座る御無用で御座る 主「放はなせ シテ「平ひらよ御無  
 用よ御座る 主「放し居れといふよ （ムリニハナシ行ク シテ見送り） シテ「お  
 りやらはおりやれ又威おどさう （元ノ通り而若テ待ツ） （主廻リナガラ） 主「扱あく  
 憎にくいやつかか某をまんと謀まかつて御座る先急いで参り  
 今度の證跡しるしを見届みとうと存る來る程に是は早清水で御座る

水

清

水

(シテ前ノ通りニ) シテ「Sぞくらほうくくく」 主「のう恐ろしやの  
(主段を踏へ下リ見ナガラユルく下ニ居テ) シテ「七ツ下つて人の來ぬ所  
 へきたあたまたからいで喰ほうく」 主「只命をは助けて下  
 されい」 (云ナガラシツカト見テ) 主「ヤイおのれの太郎冠者でい  
(シテ段々踏へ下リナガラ) シテ「いで喰ほう」 (主立テ杖取りフリ上ナガラ) 主「いでく  
 らほうを憎つくいやつの」 (シテ面サトリ逃ナガラ) シテ「免いて被下い」  
 く」 主「やるまいぞくく」 退込

- シテ 縞のしめ 狂言上下 こし帯
- 主 段のしめ 長上下 小サ刀 扇
- 面 武 悪 腰 桶

千 鳥

千

鳥

主「是ハ此邊りニ住居致す者で御座る先召使ふ者を出し  
 申付る事が御座るヤイ」 太郎冠者居るかヤイ シテ「ハア  
 主「居たか」 シテ「お前」 主「汝を呼ぶハ別の事でも無い晩程  
 客來がある程ニいつもの酒屋へ往てよい酒を樽ニつめて  
 取て來い」 シテ「畏て御座る代りを下されませい」 主「代りの  
 先日そちニ渡して置た」 シテ「夫ハ皆遣ひ切つて御座らぬ此  
 度ハお手前からお出しかされら能う御座らう」 主「某が  
 方にも無いが何とした物で有らう汝能やうニ云て取て來  
 てくれい」 シテ「此間も参つた時前のが有と申ておこすまい



鳥

千

と致<sup>いた</sup>て御座<sup>ござ</sup>るを漸<sup>あ</sup>り取<sup>と</sup>りて参<sup>ま</sup>りて御座<sup>ござ</sup>る程<sup>ほど</sup>は今日<sup>けふ</sup>の成<sup>なり</sup>りますま  
い 主<sup>ま</sup>「夫<sup>こゝろ</sup>をも算<sup>あ</sup>り用<sup>う</sup>する程<sup>ほど</sup>は今晚<sup>こんばん</sup>の事<sup>こと</sup>じや能<sup>あた</sup>りやうは頼<sup>たの</sup>むぞ  
シテ其儀<sup>そのぎ</sup>からハ成<sup>なり</sup>ませうりありませぬ知<sup>し</sup>ませぬが先<sup>ま</sup>参<sup>ま</sup>  
つて見<sup>み</sup>ませう 主<sup>ま</sup>「何<sup>なに</sup>卒<sup>そつ</sup>頼<sup>たの</sup>む シテ畏<sup>おそ</sup>て御座<sup>ござ</sup>る 主<sup>ま</sup>「是<sup>こゝろ</sup>は  
いかな事<sup>こと</sup>晚<sup>おそ</sup>程<sup>ほど</sup>客<sup>きやく</sup>來<sup>き</sup>がある程<sup>ほど</sup>はいつもの酒<sup>しよ</sup>屋<sup>や</sup>へ往<sup>い</sup>て酒<sup>しよ</sup>を取<sup>と</sup>  
て來<sup>こ</sup>いと仰<sup>おほ</sup>付<sup>つ</sup>られた先<sup>ま</sup>そりく〜と参<sup>ま</sup>らう (通<sup>とほ</sup>せ)此<sup>こゝろ</sup>間<sup>ま</sup>も参<sup>ま</sup>  
つた時<sup>とき</sup>前<sup>まへ</sup>のが有<sup>あ</sup>る筈<sup>はず</sup>用<sup>う</sup>せいと申<sup>ま</sup>りて御座<sup>ござ</sup>る程<sup>ほど</sup>は今日<sup>けふ</sup>の何<sup>なに</sup>共<sup>ども</sup>  
心<sup>こゝろ</sup>許<sup>ゆる</sup>無<sup>な</sup>い事<sup>こと</sup>で御座<sup>ござ</sup>る去<sup>き</sup>ながら面<sup>おも</sup>白<sup>しろ</sup>おかしう申<sup>ま</sup>成<sup>なり</sup>て取<sup>と</sup>りて参<sup>ま</sup>  
り今晚<sup>こんばん</sup>のお役<sup>やく</sup>は立<sup>た</sup>たい事<sup>こと</sup>で御座<sup>ござ</sup>る (通<sup>とほ</sup>せ)イヤ参<sup>ま</sup>る程<sup>ほど</sup>は是<sup>こゝろ</sup>  
で御座<sup>ござ</sup>る物<sup>もの</sup>も案<sup>あん</sup>内<sup>ない</sup>もう アト立<sup>た</sup>て表<sup>あらわ</sup>は物<sup>もの</sup>もうとある案<sup>あん</sup>内<sup>ない</sup>とい

千

鳥

誰そイヤ太郎冠者殿か シテ中く私で御座る アト此間は  
 久しう見へぬが替る事も御座らぬか シテ彼是致てお見舞  
 も申ませぬ アトして今日の何と思ふておりやつたぞ シテ  
 「夫からは追付申ませう頼ふた者申ます其後はお久しう  
 御座るがいよく替らせらるゝ事も御座らぬか就まして  
 の晩程客來が御座る程に能い酒を樽に詰めて下されいと  
 申越まして御座る アト此間は久敷う見へぬに依つて外で  
 取らしますかと思ふたれば御心替らず取し下されて満足  
 致いた シテ何が此方をさし置いて外で取と申事の御座らぬ  
 「夫からはつめておませう夫に待たしませ シテ心得まし

千

鳥

た アト樽取ニ行く シテ先ざつと仕済た物じや アト樽持テ出中へ也 アトの  
 うく是じや シテ樽ヲ取リ シテ是は忝う御座る 行リトスル アトこれ  
 く代りは シテ代り アト中く 考テ シテ申頼ふた者の方  
 より取まして棚角へちよと乗せて置ましたはたと失念  
 を致て御座る重て一所に持て参りませう 又行リトスルヲ留テ アト  
 「是く和でりよ此間の代りも持て來うといふて今に持  
 てわせぬ今日に代りが無ければ遣る事はあらぬ シテ扱ハ  
 代りが無ければ成りませぬか アト中々夫からバ代りを持  
 て参つて是を持ませう 續テ置キ少シ前へ也 シテイヤア此間久う参  
 りませぬが私の頼ふた者の供を致いて津島祭りへ参つて



千

鳥

御座る アト扱アトのさうであつたか シテ能シテい時分トキバは  
 せ路次チヨすがらいろく見物致ミモノて御座るが面白い事で御座  
 りました アト夫ウツの浦山敷ウラヤマシい某も知つたからバ行ユクう物を  
 シテ此方でもお供致トモさいでと存ゾクじました アト其色々イロイロ面白い  
 事を覺シへさしましたか シテ中々一ツ二ツ覺シへて御座るが  
 重オモシて参つてお咄ウタし申マウせう (行ユクツトスル) アト是々まづ待マツしませ  
 其方ソコが面白さうよおしやるよよつて聞キ度うてあらぬ先咄  
 さしませ シテ夫ウツからバ咄ウタしませう先二見サニミが浦で千鳥を寄  
 る体ていを見ましたが面白い事で御座りました アトハテ見度  
 い事じや シテ此コノ体を學マナうでお目メは掛カませうがちと相手オモテが

千

鳥

入りまする アト其相手は六ツムツケ敷シい事か シテ別わかまむづり  
 しい事でも御座りませぬ アトあんと某の相手をせうか  
 シテ夫ウツならばこなたよの扇あふぎを翳かいてはんま千鳥の友呼トモヨぶ聲こゑ  
 へと申事を節ふしを付つて難むづさせらるれば能よう御座る アトさう  
 いへば能よいか シテ中なく夫ウツは付つましているろく面白い事  
 を致いたしまするサアく仰おほられい (アト御座ミマノカヘシ) アトはんま千鳥の  
 友呼トモヨぶ聲こゑハ (シテ扇あふぎ開ひキサシナガシ) シテちりやちりく (アトトヲ見ミテ) 申左まへ  
 様さまは屹度見詰きつめて御座つては千鳥が寄よませぬ忍しのぶ体ていで仰  
 られい アト心得こころえた (扇あふぎニテ頭かぶカケシ) アトはんま千鳥の友呼トモヨぶ聲こゑハ  
 シテちりやちりくちりくちりくちりくどちり飛とんだり

アト「はんま千鳥の友呼ぶ聲は」シテ「ちりやちりくちりく」  
やちりくどちり飛んだり（イロク舞ナガラ樽ヲ取ラントスル アト扇引テ見ル シテ  
退テ舞 アト又ハヤス シテ又舞ナガラ取ラフトスル アトミル シテ退ク アトハヤス シテ舞終リニ廻リナガラ扇  
ヘサシ拔足シテ樽ヲトリ扇ガハリハ逃ル アト留ル都合ニ度ナリ） アト「是々どこへ持て行

千

鳥

シテ「是ハ千鳥の立つた所で御座る」アト「千鳥の立うとも此樽  
を動かす事ハ入らぬ物じや」シテ「樽ヲ元ノ處ヘ置」シテ「夫からは何が  
能う御座らう」臺持を曳体は何と御座らう アト「夫も見た事  
が無い」シテ「致てお目ヲ掛ませうが相手が入り交する」アト  
「心安い事あらは又相手をせうが何といふ事ぞ」シテ「てうさ  
やようさと仰らるれば能い事で御座る」アト「心得た」シテ「ち

千

鳥

と臺持が入りまするが（種ヲ見テ）イヤ是が能う御座る アト「是  
く動かす事ハあるまい」シテ「お氣遣ひがされますか其体  
計で御座る見ればよい繩が付て居る（繩ヲ解キ引テ）」シテ「サアく  
仰られい」アト「心得た（扇ニテ手ヲ打小廻リシナガラ）」アト「てうさやようさ  
くくく」シテ「あいともくくあいともあ  
アト「てうさやようさくくく」シテ「あいともくくあいと  
もあ」アト「てうさやようさくくく」シテ「あいともくく  
あいともあ」扇ヘ繩カケ舞シナガライロく引終リニ引テ行フトスル アト留テ アト「是くく  
こへ引くぞ」シテ「是は臺持を引過た所で御座る」アト「イヤく  
最早樽の入る事は面白う無い置かしませ（繩取テ樽ヘ結付ル）」シテ「樽

千

の 入らぬ事から何能う御座りませう(巻) シテ申く加  
 茂の競馬は何と御座らう アト是も見た事が無い シテ逆の  
 事よ是をもお目よ掛ませうか相手が入りませう アト相手  
 よは某の成らうが樽は入らぬか シテ樽杯の入る事では御  
 座らぬ此方よは扇を開いて馬場退けくと云ふて先へ御  
 座りませい アト心得た シテちと垣竹が入りませう(竹ヲ取リ)  
 イヤ是に御座る(竹杖ヲ馬ニシテ) シテサアく先へ御座れ アト心  
 得たばのけく シテお馬が参るく 飛ナガラ大廻リスル アトば  
 のけく シテお馬が参るく アトばのけく シテお馬が  
 参るく(能キ所ニテ アトヲ竹ニテ打 アト倒レル) アトあいたく(シテハ直クニ竹杖ハ)

鳥

千

相持添へシテお馬が参るくくく(飛テ行 アト起テ) アトヤイく  
 其樽を何とする シテアリ返リ「是が頼ふた人のお屋敷へ(飛ナガラ)  
 お馬が参るくく(飛テ入ル) アトあの横着者めやるまいぞ  
 く(退返)

鳥

シテ 縋のしめ 狂言上下 こし帯

主 アト 段のしめ 長上下 小サ刃 扇

腰 桶

廻ニテクル 但白水輪ナリ

因幡堂

因幡堂

シテ是ハ此邊リニ住居致者で御座る某連合を持て御座るが大酒を呑うて何共迷惑を致しますニ依り幸ヒ親里へ参つて御座る程ニ暇を遣して御座る又因幡堂の薬師ハ殊の外あらたかと申ます程ニ参て妻の事の祈誓を掛うと存る先急で参らう(進む)かう参てもあハれ能い妻を授けて下さるれば能う御座るがイヤ何かと申内ニ是ハ早お前で御座る去らる拜まう(命中心テ思)シテちどの願ヒ申上度い義が御座る只今迄の女共ハ大酒を呑うて何共迷惑致すニ依て暇を遣して御座る何卒此度ハ能い妻をおさづけおされて下さ



因

幡

堂

れい偏願上まする（願ヲ上テ） 今宵は是で通夜を致さう（テ）  
リヲ見テ 扱もく〜 廣い境内じや去らばちとまどろとませう  
（シテ手ヲ組テ眠ル） （女出橋カ、リニ立テ） 女「のう〜 夫の誠か扱もく〜 腹の  
立つ事かかこちの人童の隙を呉て又因幡堂の薬師へ妻  
籠りへ行かれたと申參て様子を見うと存る（段々舞臺入） 扱もく〜  
腹の立事で御座る何と致さうか（二回リテ） 來る程はや是じ  
やがどこ許に居らるゝかさればこそあれは居らるゝ何と  
致さうぞ（考） 思ひ出いた是を着て居てまた妻に成らうと存  
る（被衣着テ大臣鞋ノカハソロ〜行立テ居ル） シテ「ハア〜 扱もく〜 有がたい事  
かな（起テアタリヲ思） シテ「イヤ夜が明けたさらば下向せう（又廻リナガラ）

因

幡

堂

夜前あれへ籠つたれば御夢想が有た汝妻籠する事神妙よ  
思ふ即一の西門よ立たを妻よせいどのお告じや先一の西  
門へ參らう（女ヲ見付テ） あれはかんじやハ、ア夫〜 御夢想の  
お妻であらう先詞を掛う申々夫よ御座るのちつま（考） 恥か  
しうて物が云いぬ去あがら男の心と大黒柱は太うても  
あを太かれじやてんはついでのけう申〜 夫よ立せら  
れたは御夢想のお妻でなし御座るか（女ウナツク） （シテ笑） 疑ふ所  
も無いお妻じやと仰らるゝ申お迎よの輿か車かお馬を進  
じませうが私の事で御座る程は左様お物は持ませぬ只某  
の後ろを輿とも車共思し召て負いれさせられい（女ウナツク）

因

幡

堂

「賁シテはれうサア〜賁シテはきさせられい（女ナツク） 申シテ〜  
 かう参る路次シテすがら只今迄の事を咄はないてお聞かせ申さう  
（段々廻リナガラ） 申シテ「まづあの女シテいか様氣さまの登のぼつた病やまでも御座  
 るかつむりシテは髪毛かみと申ていすつべりと御座らぬ漸ゆる爰こゝかし  
 こを取集とめ十四五本も御座らうか儲目もろめと申せばどんぐり  
 目鼻めばなの高たかれう鼻はなとやら申て向むかへくつとねち上あり大酒おほしを呑  
 うで笑う顔付かほづかは其まゝ鬼瓦おにがわを見るやうシテは御座る（笑）イヤ何  
 かと申内シテは早是で御座る先まづかう通とほらせられい（女ヲ大臣桂際ヘオロ  
シ橋ガ、リヘ來テ） 申シテ「まんまとお妻つまを授まかつて御座る目出度折柄めいどせがら  
 で御座る程ほどは盃さかづきを致さうと存る（こし桶蓋ヲ持盛開テ） 申シテ「申〜目出

因

幡

堂

度折たひせからかれハ盃さかづきを致いたませう（女ウナツク） 申シテ「先まづ一ツ参つて  
 下されい（女ニツギ） 申シテ「夫つまをハ是へ下されい（女カブリフル） 申シテ「もつ  
 と参るか（ウナツク） 申シテ「いか程も参れ（橋ガ、リヘ來テ） 申シテ「是こゝ  
 いろか事今迄の女共が大酒を呑のうて御座る程ほどは暇ひまを遣つかは  
 して御座れば又あの様さまお者を連つれて参つた扱あつかい（女カブリフル） 申シテ  
（又舞臺ヘ來テ） 申シテ「申〜夫つまをハ私へ下されい（女カブリフル） 申シテ  
 「否いやといふ事ことが有るものか是非共下されい（無理ニ取り自身ツグ） 申シテ  
 「某も一ツ給たまう（女ニツギ） 又上ありますか（ウナツク） 申シテ「サア〜上あり  
 ませい（シテツグ） 申シテ「サア〜舞まを舞へ（ウナツク） 申シテ「心得こころえました  
（小舞ニツギ） 申シテ「サア〜夫つまを下されい（カブリフル） 申シテ「いやと云ふ

因 幡 堂

事が有る物か (又アリ取テ番) シテ「最早取りませう (後見坐へ置座) シテ「さ  
 らは對面を致さう申々夫をバ取らせられい (カブリフル) シテ「い  
 やと申事が御座らうぞかたど私どの五百八十萬々年も  
 添いませう平は取らせられい (カブリフル) シテ「イヤ夫からは私  
 の取つて上ませう (ムロニカツギ取女立) シテ「アイヤ和男よう童は  
 隙を呉て因幡堂へ妻籠は往たか シテ「又おのれ爰へ來たか  
 女「是へ來たかどのおのれ引裂いて呉れう シテ「ア、ゆるい  
 て呉れい 女「やるまいぞくく」

- 女 シテ 縞のしめ 狂言上下 こし帯 さな扇
- 女 箔 女 帶 びあん かつぎ
- 腰 桶

飛 越

飛

越

「是は此あたりは住居致者で御座る某今日へ去る方へ茶  
 の湯は参る又某計りでの御座らぬ爰は同道致す人が御座  
 る是を誘ふて参らうと存る先をろりくくと参らう (進行) か  
 う参つても寺は居られうか居られまいか知れぬ事で御座  
 る何かと申内は是じやのう居さしますか (シテ立テ) 表は物も  
 うどあるぞかたで御座る シテ「イヤかたで御座るか ア  
 「中々身共でおりにやる シテ「して何と思召てのお出で御座る  
 「ア「今來るも別の事でも無い内々をかたのおしやるの心安  
 い所の茶の湯へ行ならバ連れて往て呉いとおしやつた今日



越

飛

いかよも心安い方へ行程は同道せうと思ふがおりやる  
 まいか シテ假初のやうに申ましたよ御失念無う御出被下  
 で忝う存じまする去あから今日の師匠の留守で御座る程  
 は得参りますまい アト師の坊のお留守のいつもの事じや  
 又此様な心安い方は無い程は平におりやれ シテ私も飛立  
 程参り度う御座るが師匠の歸られたからバてりきりと呵  
 られませう アト其叱らるゝ分からはおりやれ咎を某の負  
 うぞ シテ其儀からは参りませうか アト夫の嬉しいサア〜  
 おりやれ〜 シテ心得ましゝ(道行) アトイヤのうかう参る路  
 次をぐらもそあたの寺に居らふか居るまいかと案じたよ



飛

宿しゆくも居ゐさふまゐてりう同道どうだうする様ようを大慶たいせきを事ことのおりか  
シテ私わたしも参まゐるまいと致いたたをこかたの色々いろくと仰おほられてかう参まゐ  
る様ようを嬉敷うれし事ことの御座ござりませぬ アト其その通りじや（二回リシテ） シテ  
「参まゐる程ほどは是こゝは川が御座ござる アト是こゝは川といふ物ものでは無ない飛と  
越こへじや シテ此こ様ような大おほきか飛とこへの御座ござるまい アト身みど  
もの飛とこへて見みせう（テト大臣桂ノ方ヘ飛） アトヤツトか シテ扱あつかもく  
お身みの輕かろい事ことで御座ござる アトさうもおり無ないサア（一）飛とし  
ませ シテ私わたしは飛とぶ事ことはなりませぬ アト是こゝ計はかりの所ところを飛とぬ  
と云い事ことが有あるものか早はやう飛としませ シテ私わたしの水みづを見みると怖おそ  
うて成なりませぬ アト是こゝはかりの水みづが怖おそいと云いふ事ことがある

越

飛

越

物ものが早はやう飛としませ シテ先まづ此こゝ目めが臆おそ病びやうじや（一）依よて目めを塞ふい  
で飛とませう（國事ニテ目ヲサギツカクト行ト） アトア、あふあい（目ヲ明）  
シテ既すでに飛とさうに致いたして御座ござるをこかたのア、く（一）と仰おほらる  
る依よて川がへはまるかと存ぞんずいて飛とれませぬ アト何なにとや  
ら今いまのあふあさうじや（一）依よて思おもはずいふたよ シテ此こゝ度ど  
は目めをふさいでつ（一）とあれから走はりか（一）つて一いっさん（一）飛と  
ませう アト是こゝの能よからう シテ去さがら川が端はたが知しれませぬ  
程ほどは川が端はたじや（一）といふて下くだされい アト心こゝろ得とれ早はやう飛としませ  
（橋ガ、リヨ目ヲサギツカクト來ルト） アト川がじや（一） （又目ヲ明テ） シテ何なに共とも飛とれ  
ませぬ殘念ざんねんが（一）ら此こゝ方はたお一人ひとり御座ござりませい私わたしの（一）かう戻もどり

飛

越

まする アト是く先待しませ(アト又飛返ル) シテ此方の又是へ御座りましたか アト折角是迄來た人を此飛こへ一ツで歸すも余り残り多い事じや此度の某のあれへ飛ぶ程は其跡は引付て勢ひかゝつて飛しませ シテ誠は引付ておらは飛れませう アト夫ならば是へ付しませ シテ心得ました(アトノ腹ニ手ヲカケテ引付ク) アト能いか シテ中く能う御座る アト夫からは飛ぶぞや シテ飛せられい アトヤツトナ(アトハ向フへ飛シテハ耳中へ響ビ向フへ飛上リ袂ヲシボル) アト見テ笑フ シテ是のいかを事何處もかしこも濡鼠のやうはあつた扱もく 苦々敷事じや アトあの形りのへの扱もくおかしい事じや(笑) シテやあらそあたの聞えぬ

飛

越

人じや是程は濡て迷惑するは共くは寄て絞つて吳うといせいで何が夫程おかしう御座る アト何がおかしいといは是計りの所を得飛いであの形りのへの(又笑フ) シテ濡たを笑止かと思ふ人か夫の余りでおりのやる惣て人の身の上は是よりおかしい事が有る物じや アト某の身の上は是程はおかしい事の有るまいぞ シテそなたの身の上は是よりおかしい事が有れども某の黙止つて居るハ アト是は聞所じや某の身の上はおかしい事が有からば早う云しませ シテ何の云ふたからば耻をかこう知らぬ顔して居させませ アト何の耻をかこう事早う有らば云しませいで

飛

越

聞ねばからぬ シテ夫からば云ふて聞せう夫去年の七月の  
 事コトで有たそおたの上の町チヨウに辻角力ツギカクがあつたでいか  
アト如何イカにもあつたが夫がおかしいか シテ先聞サキキひませ先小  
 角力カクより取上げ大角力オホカクに成て後強ノチツヨクいやつが有て出て皆拾  
 ふた最早サキ是コノに續ツく者もあるまいと思ふて居たれば爰ココ  
 角力カクこそ有れと云ふて出たを見たればそおた有つた正身シヨウジン  
 の角力カクも立かたとやらで是コノにアるまいに置かれいでと  
 思ふて手テに汗アジを握ニギつて見て居る所トコロに行司ヤクシがやつと手を合  
 するといかや彼カノ大力オホチカラめが和ニりよの小腕コウデを取ヒつて右左り  
 へ引廻ヒキマし真中マナカへ持つて往イてすでいさうと投ナたればそおた

飛

越

の痛いたさうアあなたへいちんがりこおたへいちんがり （形ヲ引  
テ其形ヲスル） シテちんがり（笑フ）として這入ヒらしました  
 顔オモテを今見る様サマで是はどおかしい事コトにあるまいぞ （笑フ）アト角  
 力は勝カも負マくるも習ナじや負たが夫程おかしいか シテ尤角  
 力カクの勝カも習ナひ負マるも習ナひかれ共トモそおたのいかつがまじい  
 形カタりをして投ナられてちんがり（形ヲシテ笑フ）を今見るやう  
 で此様サマをおかしい事コトにあるまいぞ （笑フ）アトのう（笑フ）そおた  
 の身共ミトモの負たを殊トの外ソノもどかしさう（笑フ）笑ふが夫からはお  
 りやれ一番取ヒらう シテ何と角力カクを取ヒらう （ト）中々 シテ某  
 の茶チヤの湯ユへ連ツて行イとおしやつたよよつて參た角力カクを取ヒ

飛

越

は來ぬ歸らう アトさう云ふたりども是非とも取らねば歸  
 さぬ シテ扱ひ取らねばからぬか アト中く シテ夫からは  
 一番取らう支度をさしませ アト心得た シテ十徳抜ギ アト小サ刀ヲ  
 取也 シテ何と支度の能うおりやるか アト中く能いとも  
シテ夫からばかり出さしませ アト心得た行司も無い程よい  
 さ立合ひう シテ能からう ニ人イヤアくく 兩人真中へ出テ打  
テ常ノ通り角力アリ終ラニ アトシテノ手ヲトリ引廻シ真中へ投テ入也 アト勝たぞくく  
シテ起テ シテヤイく茶の湯に連れて行と云ふて此様を目よ  
 合したやるまいぞく

飛

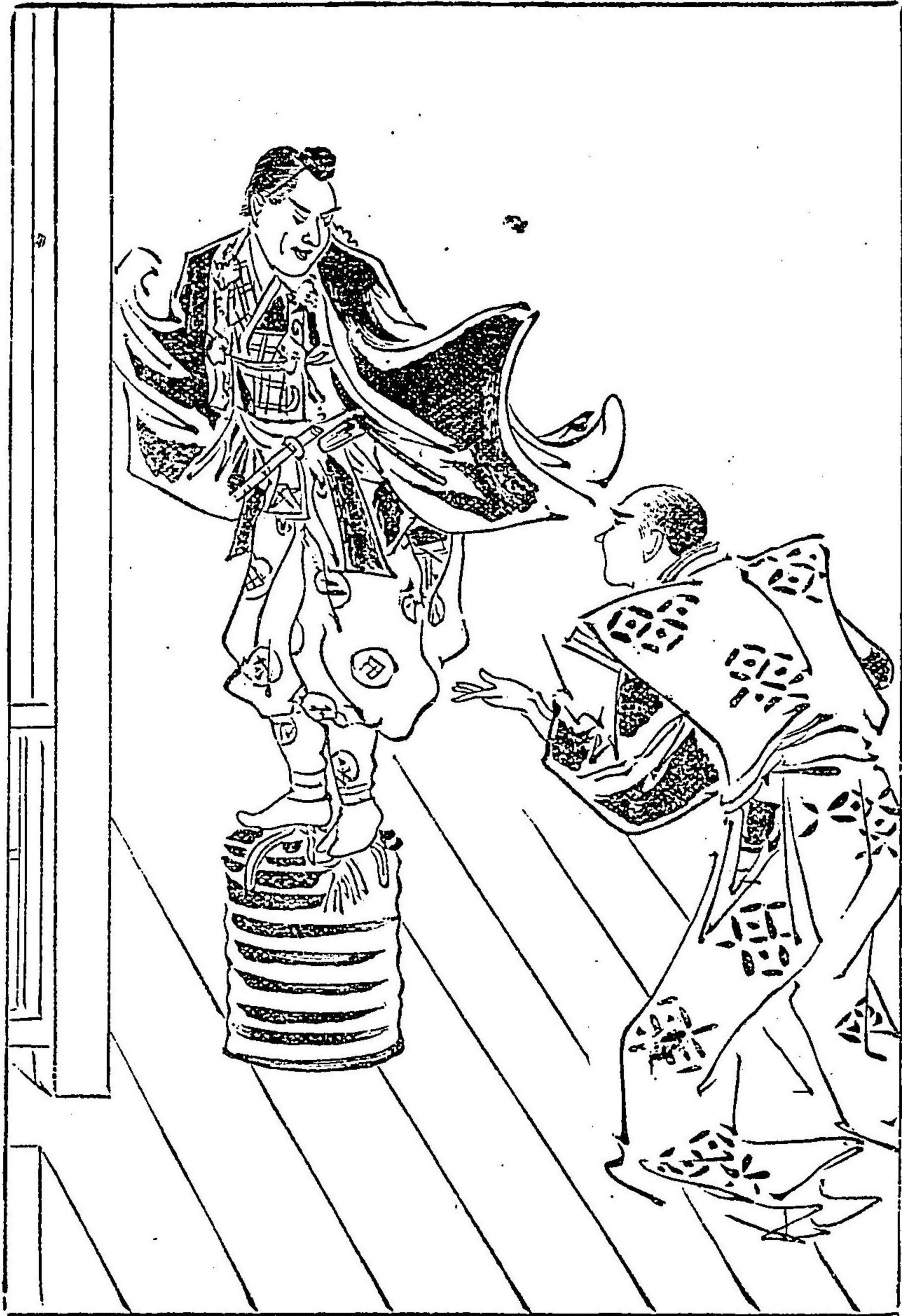
越

シテ 縞のしめ 狂言袴 十徳  
 合仕頭巾 珠數  
アト 段のしめ 長上下 小サ刀  
 扇

柿山伏

柿山伏

山伏<sup>シテ</sup>目<sup>シテ</sup>をも持たぬ山伏はく道々<sup>シテ</sup>を吹かうよ(権取正面)  
 「是<sup>シテ</sup>は出羽の國羽黒山より出たる客僧<sup>シテ</sup>で御座る某此度大  
 峯葛城を致し只今がかけ出で御座る先づそりく」と参  
 らう(道行) 誠<sup>シテ</sup>は山伏の行といつハ難行<sup>シテ</sup>苦行捨身の行を致す  
 よよつて只今いかを空飛ぶ鳥をも目の前へ祈落<sup>シテ</sup>を程よ  
 行力が達して此様を大慶<sup>シテ</sup>を事は御座らん(シテ桂へ來テ) けさ早朝  
 より道をさいたれば殊の外咽<sup>シテ</sup>がかい<sup>シテ</sup>此あたりは茶屋の  
 無いか知らぬ(テタリヨル) 見た所は茶屋もあい(大臣桂ノ方見) あの  
 向うは赤う見ゆる何じや紅葉であるかハ、ア柿じやあれ



柿 山 伏

を一ツ給べたからを咽の乾きも止むで有らう何卒して取  
 り度い物じや（巻まづ礫を打て見う右ヲトリ向フへ打）ヤットナエ  
 イ當らぬ今一ツ打う（又取テ打）ハ、ア越た何と致さうイヤ腰  
 の物で拂ひ落さう（小サカヲ扱左右へ拂ヒ）ハテ届かぬ（分ヲ置キ大臣柱ヲ兩手ニテカ  
 、エヌスリ見師へ下リ又見テ）いかか大木おればゆつすりとも致さぬ何  
 とした物であらう（こし柿ノ有ルヲ見テ）是は足代がある是は是が  
 よい（大臣柱ノ前へ持行き）去らば上らう（柱へ手ヲカケ上ル）下で見たとは違  
 うて殊の外大きいさらば給う取口へ入扱もく（むまい事か  
 き咽の乾きがすきと能うかつた今一ツ給う是は濫い口直  
 しは今一ツ給うイロく云取り喰フ）シテ柱へ上ル時分ニアト出也  
 アト是ハ此あ

柿 山 伏

たりで樹木を數多持た者で御座る此中ハ彼是暇入が有つ  
 て見廻りませぬ今日いちと見舞うと存て罷出た先參らう  
（舞臺へ入ル）是からが某の屋敷で御座る此間久しう見ぬ内は何  
 もかも能うかつた事か柿あどハ別して能う出來て御座  
（大臣柱ノ方へ行クトシテ柿ノ核ヲ吹付ル）アト驚キ見テ跡へ退き  
 アト「是はいかか事何者  
 やら柿の核を吹付おつた合點の行かぬ事じや（能く見テ）アト  
 「ハ、ア何處とも知らぬ山伏の某の秘藏の柿の木へ登り柿  
 を盗んで喰う扱く（憎い事）で御座る何と致さうぞ（巻イヤ  
 致しやうがあるエヘン）（咳チスルシテ袖ニテ顔カケス）あら不思議や爰か  
 柿の木ハ風も吹かぬは揺ぐハ合點の行かぬ事じや（玉ヲ見テ）

楠 山 伏

ハ、ア搖ぐこそ道理かれ何やら止つてゐる何で有らう夫  
 く臆が黒い鳥じやさうか シテ「是のいかを事鳥じやと云  
 ふ アト」鳥といふ物の人を見ると其儘啼く物じやが爰を鳥  
 もちと啼うぞや啼すの人は知らぬ 森ノカタ見 ヤイく 其半弓  
 を持て来い射殺してやらう シテ「是の啼きのかるまい アト  
 サアく 啼うぞや シテ」こかアく (アトモ同シヤウニコカアくト云笑フ)  
 アト「是のいかを事鳥といふたれば人と鳥と見違ふ物のやう  
 に其儘鳥の眞似を致してコカアく (笑) 扱もく 是のよい慰  
 みじや (又シテノカタ見テ) 今の鳥の能く啼たりく」が是の某の目  
 が違ふた鳥での無い野ら猫じや シテ「また猫じやとぬかし

楠 山 伏

居る アト「猫といふ物の人を見ると其まゝ吹いつ威じつす  
 る物じやがおどさすの人有らう (森ノ向キ) ヤイく 其鐵炮  
 を持て二ツ玉をおませうぞ シテ「是の啼かすの成るまい  
 アト」サアく 啼うぞよ (シテ猫ノ眞似ヲシテ終リニニヤアト云) (アトモニヤアト云  
 テ笑) アト「猫じや云ふたれば其儘猫の眞似を致した今度はさ  
 やつが得い眞似の致されぬ事を申度いガ (考) 思ひ付いた扱  
 々今の猫の能う啼たりく、じやが是も又目が違ふと猫で  
 の無い是の珍らしい物じやもゝんぐわとやらいふ物じや  
 シテ「又もゝんぐとじやといふの アト」もゝんぐわといふ物も  
 人を見ると其まゝ啼く物じや爰もゝんぐわもおしつけ

柿 山 伏

啼うぞや啼かすの人も知らぬ(息)ヤイ〜其鎗(銃)を持って來  
 いたつた一突(つ)突(つ)抜(ぬ)いてやらうぞ(シテ)も〜んぐわの啼や  
 うを知らぬが何とした物で有らう去(き)ながら是も啼かすよ  
 は居られまい(アト)サア〜啼かうぞよ〜(シテ)も〜んぐ  
 ぞア(アト)も〜んぐぞア(シテ)も〜んぐわア(アト)も同(アト)タ云テ卷(アト)も  
 むんぐわの鳴様(な)を知らいでも〜んぐわ〜(笑)扱々  
 能(な)い慰(なぐさ)まじやイヤ〜又目が違(ちが)ふたヤハリ最前(さいぜん)の目が能  
 い鳥類(とり)じや鳥類(とり)の内での何で有らうハ〜ア(アト)驚(おど)じや(シテ)是  
 いかお事また驚(おど)といふ(アト)驚(おど)といふ物の人を見ると  
 其儘羽(ままは)をのす物じやが爰(こゝ)な驚(おど)も追付(おっつけ)のさうぞよ〜己(おの)れ

柿 山 伏

れのさずは人で有らう引(ひ)ずり下(くだ)ひて此腰(こし)の物ですた〜  
 よしてやらうぞ(シテ)是ものさき(さき)の成るまい(アト)サア〜  
 のさうぞや〜(シテ)右(みぎ)の袖(そで)ヲ開(ひら)キ見(み)ヌル(アト)去(い)ればこそ(アト)のいたり〜  
 今度(こんど)の今片(いまかた)〜をものさうぞ(又)左(ひだり)の袖(そで)ヲ開(ひら)ク(アト)身(み)せゞぞを  
 せうぞ(シテ)頭(かぶ)ニテ身(み)セ、リナヌル(アト)身(み)ふるいをもせう(身)フルヒナヌル(アト)  
 「扱(あ)是からの飛ぶ物じや(シテ)是(こゝ)のいかお事何と此高(たか)い木か  
 ら飛るゝ物か(アト)爰(こゝ)な驚(おど)も追付(おっつけ)飛ぶぞよ〜(息)ニテ手ヲ打(う)チ  
 ニテ(アト)飛ぶぞよ。飛さうぞ(シテ)袖(そで)ヲ破(やぶ)ケナガラ(シテ)ヒイ〜  
 ウロウ(アト)音(ね)を出(だ)タ(シテ)ヒイウロウ(アト)飛ぶぞよ(シテ)ヒ  
 イウロウ(アト)飛さうぞ(段々)早(はや)メテ云(い)フ(シテ)早(はや)メテ云(い)フ(アト)一(ひと)廻(まわ)リシテ云(い)フ(シテ)飛(と)ビ



柿 山 伏

「あいたくくく」(アト笑テ) アト「痛いことを道理かれあの高い木の枝からお飛やつた物を夫は緩りとおりやれ」(行キサワニスル)

「ヤイくく」そこをやつ (アトフリ向ク) シテ「あゝら己れの憎いやつの大俗の身として此貴いかけ出の山伏を最前より鳥類畜類は譬へ今又鳶に成たいふ物で山伏の果は鳶よも成る物じやと聞たよよつて最早羽根が生へたかと思ふて飛たればまたろくに羽根もはへぬ物をあの高い木の枝から飛せて腰の骨を打抜いた程に連れて往て腰の立迄養生をして返せ」アト「あらそちはむさとした事をいふ何處とも知らぬ山伏の某の秘藏の柿を喰うのみからず腰の抜たを連れて

柿 山 伏

往て養生させう筈の無い其様を鈍な事ハ云ぬ物じや

「ヤイそこをやつ凡かけ出の山伏は遣ふ詞こそあれ鈍な杯と云ふた成らば子孫は於て後悔させう」アト「何の後悔シテおう後悔させう」アト「イヤく物じてりけ出の山伏は構ぬ物と申急で宿許へ歸らう」(行ツトスル) アト「ヤイくやいそこなやつ己れのこれへ行テ」アト「宿へ歸る」シテ「宿へ歸るからは最前も云ふ通り某をも連れて往て五日も十日もかくまうて腰の立つまで養生して返せ」アト「あらをかたにくさい事をいふそちの腰の抜たを某の養生させう筈が無い其様をむさとした事ハ云ぬ物じや」シテ「さういふたりとも宿への

柿 山 伏

行すまいぞ アト夫の誰が シテ身共が アト何として シテ行  
 力を以て祈り戻いて見せう アト笑テ アト柿を盗んで喰う山伏  
 の行力あんの怖物か其上某が此達者を臆で行くに何の行  
 かれぬ事が有う シテ夫の誠か アト誠じや シテ眞實か アト  
 眞實じや シテ一定か アト一定じや (シテ手ニテ下ナ打珠敵ヲ山シナガラ祈リ)  
 シテ悔むを男く 大嶺の雲を忘のぎ 年行の功を積む事一千  
 余ケ日おんバく 身命を捨日頃頼み奉る不動明王のさつ  
 くの繩よて繋ぎ留あバあぞ一足も働せじとさも高聲よこ  
 う祈けれほろんくくく 橋の下の菖蒲の誰が植たせ  
 うぶぞ刈つても刈られぬほろんくくく いろはよほ

柿 山 伏

へどほろんくくく (由内ニテト) 急で宿許へ歸らう 梶ガ、  
 (ト) 去かから何事を申か承らふと存る (シテノ時ヲ立テ時ヲ待テヤロ  
 くスル体ニテ) 是のいかか事或の一足も行かれぬ (ナドイロく云テ終リ引  
 戻サレタル体ニテ) アト是非に及べぬ負のれい (ト云シテテノ前へ來リ行キ出ス) (シテ見テ  
 珠敵ニテヨツ打ナガシ) シテ見へたか (シテトノ肩へ手ヲ掛セ) アトまかふして  
 おけ (シテテヲ見ロ(轉バシテ入ル)) (シテ) 南無三寶欺されたあのちやくもの  
 やるまいぞくく (ト云くシテヤカシク)

シテ	厚板	縞 <small>ニテモ</small>	寄水衣	狂言袴 <small>ケル</small>
	こし帯	小サ刀	珠數	頭巾
アト	鈴掛			
	段のしめ	長上下	小サ刀	腰桶

ズ ス

主「是ハ此あたりニ住居致す者で御座る先召使ふ者と呼出し申付る事が御座るヤイ」太郎冠者次郎冠者居るかや  
 い 二人ハア—— 主「居たか 二人お前」 主「汝等と呼出すハ別の事でもあい某ハ去る方へ行程ニ能う留守をせい 太郎冠者」  
 「畏てハ御座れどもいつも兩人の内一人お供ニ召連れられまする程ニ次郎冠者ありと私成りトナ 太郎冠者」其通り 太郎冠者  
 人お供致しませう 主「汝らがいふ通り毎も二人連るれども今日の思ふ子細がある程ニ兩人共能う云合せて留守をせい 二人」畏て御座る 主「まづ夫ニまてこし桶持て出立申中ニ候」 主「是

ブ

いふすといふて人の身は<sup>大毒</sup>じや風が當つてもめつきや  
くする程は能う番をせい 蘆夫からハ兩人共は参りませ  
う 主「かせよ 蘆でもあれが留守を致しまする 主「夫ハ  
汝等が聞様がわるいとち達のいふハ留守身共のいふハ  
すといふて風が當つてもめつきやくする物じや能う留守  
をせい 二人畏て御座る 主「頓て戻らう 二人頓てお歸りな  
されませい 主「心得た （兩人見送り 太郎ハレテ柱 次郎ハ笛ノ上ニふるニ居ル） 太郎  
「ヤイ次郎冠者下に居さしませ 次郎心得た 蘆いつも兩人  
の内一人参るが是ハ合點の行かぬ事じや 二人身共の思ふ  
ハあのふすが大事のお寶物と見へた 太郎其通りじや （次郎立て

ス



太郎座の方へ逃ナガラ 次郎わこわ物じや是の何事じや(太郎モシテ柱の方へ立つ)  
 次郎ぶすの方からかまぬるい風が吹て來たに依つてめつき  
 やくする事かと思ふて逃た(次郎又下ニ居ル) 次郎扱くそちは比  
 興か者じや身共まで能い肝をつぶいた(太郎モ下ニ居ル) 次郎扱く  
 是の淋敷事じや 次郎其通りじや 次郎のうく某のあのぶ  
 すを見度うかつた ニヤレ爰か者側の側へも寄るかど仰せ  
 られたに見てよい物か 次郎さうぞいあるが自然人のそち  
 の頼ふた物の方よぶすといふ寶物のあるが見た事があ  
 るかと仰せられた時よ知らぬといひいれまい 次郎夫の尤  
 かれども風が當つてさへめつきやくせると仰られた見る

ア

ス

ブ

ス

事はあるまい 次郎夫からは風をあふぎ久して見ろ 次郎是  
 の能からう 次郎去あらば某の紐を解く程よ其方蓋を取ら  
 しませ 次郎心得た 次郎サアくあをがしませ(太郎そろく立て  
 桶の側へ行) 次郎あををぐぞ(次郎ハ扇ヲ開キアフレ) 次郎あをがしませ(次郎  
 解いたぞ) 次郎あふぐぞ(太郎桶の側へ行紐ヲトキテアトへ逃ナガラ) 次郎解いたぞ(次郎  
 逃ナガラ) 次郎どいたか 次郎サアく蓋を取らしませ 次郎  
 「紐をとくのよけれども蓋を取るのこわ物じや 次郎随分と  
 あふいでやる程よ早う取らしませ 次郎随分精を出してあ  
 ふいでくれい 次郎心得た(太郎前ノ如クスル) 次郎随へヨル 次郎サアくあ  
 ふがしませ 次郎あふぐぞ 次郎あふがしませ

ブ

太監おふぐぞ〜 (次郎蓋ヲ取り筒へ逃ル) 太監取つたぞ〜 太監取つた  
 か〜 太監取つたぞ〜 太監取つたか〜 太監先生物での  
 かいと見へた 太監夫のあせよ 太監生物からは蓋を取ると  
 其儘飛出る筈じやが生物でかいと見へた 太監其通りじや  
 (太監そろ〜と寄て桶の中をのぞく) 太監是〜 寄らませせか 太監のう〜  
 中は黒い物がどんぞりとしてあるの 太監すかね事じや  
 太監のう〜 某のあのおすが喰たうかつた 太監扱〜 をか  
 たの無分別を事を云ふ人じや何と喰ふてよい物か 太監某  
 のおすよりやうじられたと見へてしきり喰たう成つた喰  
 ふぞ (太監出ル 次郎止ル) 太監何といふてもやる事からぬ (太監ノ左リノ

ス

ブ

手ヲ押サヘル) 太監引かる〜 袖を振り切てぶすの許よぞ寄よける  
 (桶ノ前ニろくニ居テ桶ノ中ヲカキ廻シ喰フ 次郎見テ) 太監扱も〜 苦々敷事かおは  
 や喰うけか (太監喰ナガラ左リノ手ニテ頭ヲオサヘむト云テ下ニツツムク 次郎見テ) 太監去れ  
 はこそヤイ〜 太郎冠者氣を付けいヤイ〜 (太監ノ背へ手ヲ掛ケユ  
 スル 太監顔ヲ上テ次郎ヲ見ナガラ) 太監砂糖じや 太監何じや砂糖じや 太監中  
 く〜 たまされたこちへおこさしませ (次郎桶ヲ大臣柱ノ方へ持テ行歸ニテ喰フ)  
 又こちへもおこさしませ (兩人アチコチへ持行喰フ) (但シ區ノ要ノカラ中へ入テ喰フ)  
 (終リニ次郎ノ方へ持テ往テ喰フ時) 太監ヤイ〜 皆よするか〜 太監皆よす  
 るかとは底よ有たを拂ふて喰うた 太監能い事を召れた頼  
 ふぞ人のお歸をかされたから其通り云うぞ 太監喰初め

ス

ブ

たは其方じや程よ有様に申上る 太監是はされ事じや 次郎  
 「能い肝をつぶさせた 太監あのお掛物を破らしませ 太監イ  
 ヤ〜破る事はあらぬ 太監破らねばぶすを喰うた云譯が  
 無い 次郎夫からは破らう (次郎臨坐へ立テ右ノ手ニテ下へ引) 次郎さらり (左リ  
 ノ手ニテ引) 次郎さらり (両手ニテ引) 太監さら〜〜 太監能い事を召  
 れた頼ふた人の大事のお掛物を破るといふ事がある物か  
 お歸り被成たからは此由を申上るぞ 太監是もそちが破れ  
 といふたよ依て破つたハ 太監是もされ事じやあの臺天目  
 を割らしませ 太監イヤ〜割る事はあるまい 太監今度は  
 兩人して諸わりませう 次郎能からう (兩人正面へ向キ合持テ下へ投ル) 太監

ス

ア

「ぐわらり 次郎ちん 三人巻 二人粉微塵よなつた 太監扱頼ふた  
 人のお歸りあされたからは何とぞ 太監只泣け 太監泣  
 け 太監中〜 太監泣さへすれば能いか心得た 太監最早お  
 かへり被成る、時分じや下よ居させませ (二人シテ柱ノ下ニ居ル) (主一  
 ノ松へ立) 主「余程慰うで御座る先急で宿許へ歸らう (シテ柱ノ上  
 へ通リ) ヤイ〜戻つたぞ〜 (太監次郎共下ニ居テ泣ク) (主見テ) 主「あ〜ら  
 已れらは某が歸つたを悦いせいでほゆるハ何事じや 太監  
 「先をかた申上い 太監先わでりよいはしませ 主「先太郎冠  
 者いへ 太監夫からバ申上まするさいせん次郎冠者が申ま  
 するハ余り淋敷い程よいさ角力を取らうと申まする程よ

ス

私のいふと申て御されは無理、私の小がいを取つて引  
 立まする、依て余り迷惑さよお掛物に取つて御座れば  
 あのとく破れまして御座る（主見） 主「是のいか事大事  
 の掛物をさんく、破りおつた扱々憎いやつじや 太座夫  
 より右左りへ引廻いてあの臺天目の上て持て往てづでい  
 どうと投ましたよ依てあの様よ割まして御座る（主又見） 主  
 「扱もく憎いやつじや已れらゝ気が違ひおつたか 太座  
 生けてゐおかせられまいと思ふてあのふすを喰うて死  
 うと思ふてナア 太座ア、太座一口喰うても死なれぬと  
 太座二口喰へどもまた死なず 太座三口 太座四口 太座五口 二

ブ

ス

ブ

ス

「十口余り皆よあるまで喰たれど死なれぬ事の目出度さ  
 よあゝらかゝらかたや候（主）「あんでもかいやつあつちへ  
 うせい 二人ハア 主「またそこよ居るか 二人ハア

太座共

編のしめ

狂言上下

こし帯

扇 差

主

段のしめ

長上下

小サ刀

扇 持

こし桶



骨 皮

骨

住寺是ハ此寺の住寺で御座る先新發意を呼出し申渡す事が御座るのうく、おんぼち居さしますかシテ立テ、シテ某を呼ばせらるゝ、何の御用で御座る、住寺をかたを呼ぶは別の事でも、あい和でりよも殊の外成長した事かれハ最早身共は隠居してをかたへ此寺を讓程よさう心得さしませ、シテ夫は忝う御座る去かからまた遅からぬ事で御座る先かたお持なされたからハ能御座らう、住寺夫は先奇特な事じやが斯様よ申からハ今日よりして和でりよが住寺じや程よ随分寺を大切よさしませ又隠居するとても外へ行事でハ

皮

骨

かい此寺の内よ居る程よ旦那衆の用があつてわせたからハ何事も身共へ相談のさしませ、シテ心得まして御座る、住寺又後程お目よかゝらう、シテハア（テト臨坐方ニ下ニ居ル）、（シテハ見送りシテ柱ニテ）のうく、嬉しや此寺をいつ讓らるゝかと存じて御座つたよ今日讓られて御座る皆若衆を呼集めて碁將碁かど慰よ致さうと存ずれば此様か大慶な事は御座らぬ（箇ノ方ニ下ニ居ル）、アト出テ、是は此他りの者で御座る今日た所用あつて町表へ参る先そりくゝと参らう是ハいか事雨が降つて参たお寺へ参り傘を借りて参らう則是じや物もう案内もうシテ立テ表よ物もうとある案内とハ誰ぞ、アト物もう

皮

骨

皮

シテ物もうどのこあたで御座るか アト中く私で御座る  
 シテ能うこそ参らせられた アト此間の久しうお見舞申ませ  
 ぬが何と御息才は御座りまするか シテ一段と息才は御座  
 る夫は付てお咄し申さうと存じて御座るが師匠も隠居致  
 いて此寺を某は譲られましよ アト夫はお目出度い事で御  
 座るとうも存て御座らうからはお悦びを申ませう物を  
 シテ是れから折く御出被成れい アト忝う御座る シテ扱今  
 日た何の御用で御出被成ました アト只今参るの別の事で  
 も御座らぬ去方へ参りまするが俄に雨が降て参て迷惑致  
 します何卒傘を貸して被下い シテ安い事かして進せう

骨

皮

夫は待せられい アト心得ました シテ傘ヲ持出 是く是で御座  
 る アト取テ 是は忝う御座る アト去らは斯う参りまする シテ能  
 う御座りました 二人去らばく アト入 シテ此由師匠へ申ませ  
 う申御座りまするが 住寺立テ 誰じやく イヤおりやつたか  
 シテ中く私で御座る 住寺して替る事もおりあいか シテ中  
 く替る事も御座りませぬが只今誰が見へまして御座る  
 住寺何といふて来たぞ シテ余所へ参るが雨が降て参つた  
 は依て傘をかして呉いと申て見へましたよつてかして  
 やりませた 住寺夫は貸してもよいがどれを貸して遣らし  
 ました シテこあたのを貸しました 住寺身どのの一度もさ

骨

皮

さぬのをかしましたか シテ中く 住寺無さとし事をさ  
 しました傘杯といふ物の一度さしても其ま損じる物じ  
 や重てもある事じや借すまいと思ふよの安い事での御座  
 れ共此間師匠の永雨よさいて出られたれば折節辻風が吹  
 て来て骨の骨皮は皮とばらくよあつて御座る程よ骨皮  
 共よ中を結うて天井へ打上て置た杯と云て借さぬ物でお  
 りやる シテ心得ました 住寺ちと氣を付さしませ シテハア  
(住寺元へ座ス) (シテハ立テ居テ) シテ是のいか事氣の毒か事を致いて叱  
 られて御座る是からの誰が参つても返事の致しやうが御  
 座る (シテ元ノ如ク下ニ居ル) (又アト橋カ、リヘ立テ) アト是の此邊の者で御座る

骨

皮

某叶のぬ用事有て遠方へ参る夫よ付寺へ参つて馬を借り  
 て参うと存る來る程よ是じや 案内前ノ通り掛合アリテ 又アト只今参る  
 別の事でも御座らぬ某遠方へ参りまする程よ何卒馬をお  
 かし被成て下されい シテ安い事での御座れども此間師匠  
 の永雨よさいて出られて御座れば折節辻風が吹て参つて  
 骨の骨皮の皮とばらくよあつて御座る程よ骨皮共よ中  
 を結うて天井へ打上て置いて御座る程よありますまい 又アト  
アノ馬を シテ中く 又アト扱く 夫の替つた事で御座る夫  
 からのかう参りまする シテ御座るか 又アト中く 二人さら  
 ばく (又アト入ル) シテ立テ シテ此度の借さぬによつて御機嫌で有

骨

皮

らう申御座りまするか（住寺前ノ如クモ） 住寺誰じや シテ私で御座  
 る只今誰殿の見へまして御座る 住寺何といふておりやつ  
 た シテ遠方へ参る程は馬をかして吳と申て見へました  
 住寺おう安い事借してやらしましたか シテイヤくかしま  
 せぬ 住寺何ぞ馬の入る事でも有るか シテ此間こあたの借  
 すかと仰られた程はかしませぬ 住寺馬の事は云ぬが何と  
 云はなました シテ此間師匠の永雨はさいて出られました  
 れハ折節辻風が吹いて骨ハ骨皮は皮と成まして御座る程  
 は中を結うて天井へ打上て置いて御座るは依つてあります  
 まいと申てかしませぬ 住寺是はいか事夫は傘の事じや

骨

皮

其様か事を云事がある物かもし馬をかすまいといふは  
 此間野へ艸をはませよ出しまして御座ればたくるひを致  
 いて腰の骨を打抜て御座るよよつて馬屋の角へ蓑を着せ  
 て置た杯といふて借さぬ物でおりの扱くそあたの鹿  
 想か人じや夫でハ寺を持事はあるまい氣を付けさしませ  
 シテ心得ました（前ノ通り立テ） 是はいか事借さぬわかさぬとい  
 ふてお叱りやる某は茶ありと引て居ませう（下ニ居ル） 又アト出ル  
 アト是ハ御あたりは住居致者で御座る明日は某の心ざしの  
 日で御座る程に旦那寺へ参り齋の事を申さうと存るいや  
 くる程は是で御座る物もう案内もうシテ立テガラ扱く物もう

骨

名けい事じや寺持てらもちよかれは隙ひまの無い物で御座る前ノ通リ案内掛合  
アト「只今参るの別の事でも御座らぬ明日は某が心ざす  
 日で御座る程よこあたよも長老様ちやうじやうも御出かされて齋さいを  
 参まゐて被下いシテ夫おとこの忝かたじけなくう御座る去ながら某は参らうが長  
 老ちやうじやうよのありますまいアト夫はさし合でも御座るシテ左  
 様では御座らぬ此間野へ艸くさをたませよ出しまして御座れ  
 ばたぐるひを致いたして腰こしの骨ほねを打うち抜ぬけて御座る程よ馬屋の角かどへ  
 菰こもを着きせて寝ねせて置いて御座る程よありますまいアトアノ  
 長老様をシテ中ちゆうくアト扱あく夫は氣きの毒どくを事で御坐る  
 夫からばこあた斗たたかりお出かされいシテ心得こころえましたアトか

皮

骨

う参りますシテ御坐るかアト中ちゆうく二人さらばくテト  
入シテ前ノ通リのうく嬉うれしやまづ此事を申さうか御坐りま  
 する侍誰たれじやシテ私わがで御坐る只今誰殿たれどのの参りまして  
 明日の心ざしの日かれをこなたよも私にも参り齋さいを進上しんじやう  
 と云うて見へました侍奇特くわてつか人じや某も行かうシテこ  
 あたのありますまい侍夫おとこの合せよさし合でもあるか  
シテ此間云へど仰られた事を申て御座る侍何と云ひしま  
 したシテ長老よの此間野へ草をはましよ出しまして御座  
 ればたぐるひを致いたして腰こしの骨ほねを打うち抜ぬきました程よ馬屋の角かど  
 へ菰こもを着きせて寝ねせて置おきましたればありますまいと申て御

皮

骨

皮

座る 住寺 是のいか事扱々己れの鈍事鈍を云ふ夫ハ馬の返事返でこそあれ其上いつ身共身共がだ狂狂ひした事が有る シテ  
 「左様左様は仰せられぬ物で御坐るこそたもた狂狂ひをかされた事が御坐る 住寺 あゝら己れの某某は恥恥をかへせおる有るからバ早う云へ シテ 夫からは申ませう此間門前門前の與茂太郎の女房が参つたればこそたの機嫌機嫌が能うありまして何やら目かせをして奥へつれて往て時からぬ盃盃を出し差差いつ差されつゝ 笑 あんとた狂狂ひをかされたので御坐らぬか 住寺 あゝら己れの憎憎いやつの云云ひせておけばはうづが己れ已れ胴骨胴骨を打折打折て退退きやう シテ 打打ツトスル シテ 咎咎もかい物を叩叩

骨

皮

かれの致致すまい 住寺 某の打擲打擲するは何事の有つて ト兩人組合  
 いかは師匠師匠でも負負くる事でない 常ノ通りイヤ〜ト組合終リニ住寺ヲ投テ入ル  
住寺 ヤイ〜師匠を此様此様にして罰當罰當りめやるまいぞ〜  
住寺 無地のしめ 衣 中 啓 珠 數  
シテ 角頭巾  
シテ 縞縞のしめ 狂言袴 へんてつ 合仕頭巾  
シテ こし帯  
アトニ入 縞縞のしめ 狂言上下 かし帯  
赤ノアト 段段のしめ 長上下 小サ刀 扇  
 紅葉傘

狂言獨習全書終

明治廿九年十二月廿五日印刷  
明治三十年一月二日發行

日本橋區通三丁目十三番地

編輯者兼  
發行者

內藤加我

日本橋區新和泉町一番地

瀧川民治郎

日本橋區通三丁目十三番地

發兌

金櫻堂

日本橋區新和泉町一番地

印刷所

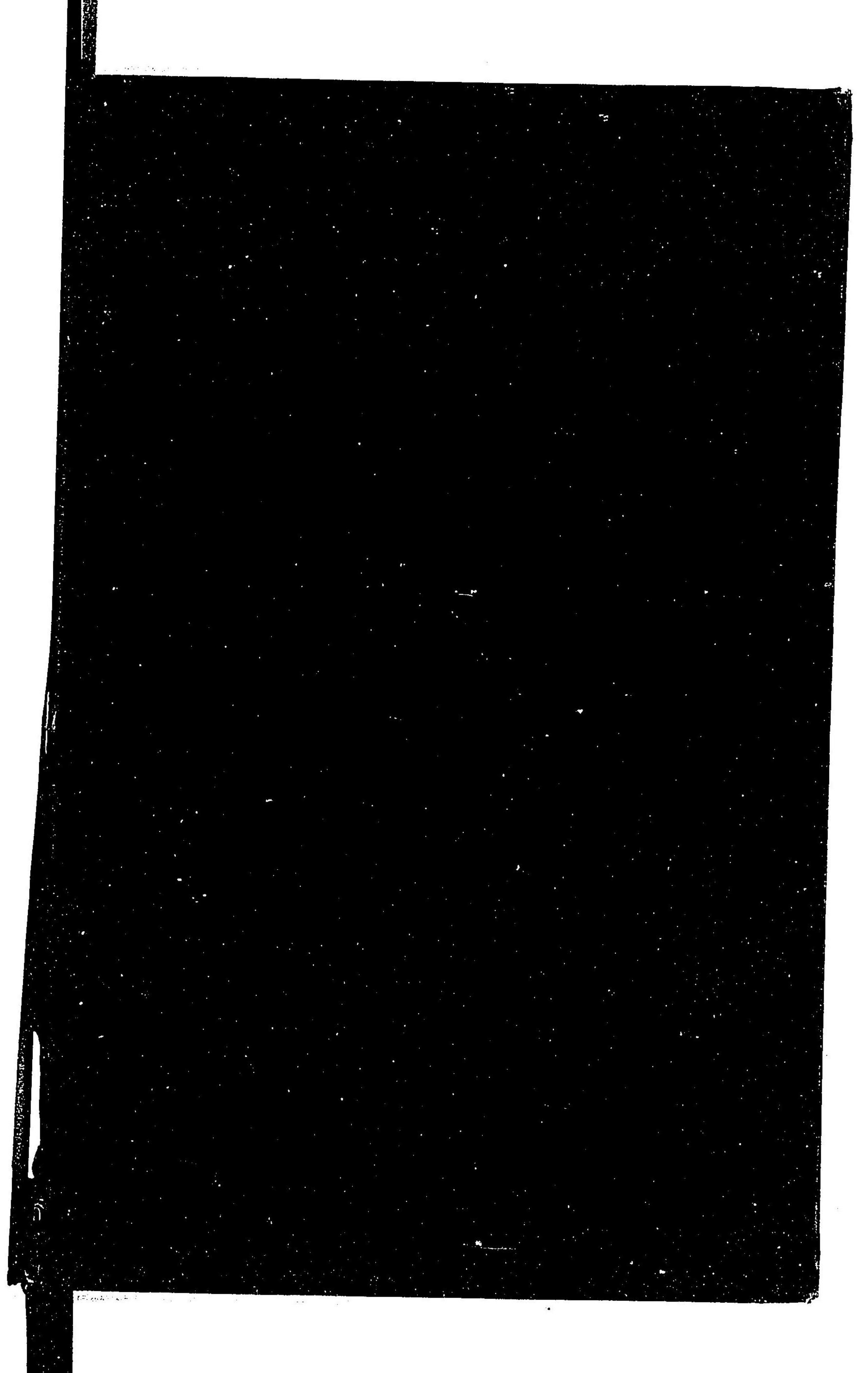
今古堂活版所

版權所有

狂言獨習

74  
u.9





74

49

Ⓜ

074977-000-4

74-49

狂言独修全書

内藤 如我/編

M30

CEL-0777



